

国内外の旅先で心に留めた光景

国外編

1. モンゴル秋営地 2023. 11. 1～8

11月1日から8日まで、モンゴルヒツジとヤギの調査に出かけた。

1995年に初めて調査を開始してから28年の歳月が流れた。今回で14回目の訪問となった。

秋営地ではあったが、訪問2日目に積雪があった。外気温は、 -10°C 。ゲルでの生活や放牧調査は、楽しいひと時でもあり、今回も二度とない貴重な体験となった。

改めて、ライフワークの羊・山羊の行動調査を継続していきたいと決意した。

モンゴル国ボルガン県アルシャンツ地区の秋営地における羊・山羊群の日帰り放牧。

約800頭の多くは♀である。10月20日～11月末日までが繁殖期のため、山羊2頭と羊5頭のみがこの中に含まれている。茶色が山羊、白色が羊。

遊牧民の秋営地から放牧地に出発する場面から放牧地を1日に約7～9km移動しながら採食し、再び遊牧民の秋営地に戻るまでの4行動場面を約10分間のビデオにまとめた。

調査2日目に積雪があり、羊・山羊群は、積雪をかき分けながら牧草を食べ移動を繰り返した。













2. モロッコ 2018.2

アフリカ北西部に位置するモロッコ。北は、ジブラルタル海峡と地中海、西は大西洋。中央にはアトラス山脈がそびえ、大西洋からの温暖な空気を遮断。この山脈を南に超えると乾燥したサハラ砂漠にたどり着く。

アーモンドの花が咲き誇り、花の色はサクラに似た淡い淡いピンク。一足先に春を満喫した。



サハラ砂漠とラクダ

エルフードからメルズーガ周辺のサハラ砂漠を見に出かけた。砂丘が赤い。



フェズ市内で見かけたコウノトリの営巣

建築物の先端にコウノトリが営巣しているのを見かけた。
日本ではとうてい見ることのできない場面である。



カスバ街道

車窓からアトラス山脈を望む。カスバ街道には、トドラ渓谷がある。モロッコのグランドキャニオンと形容されるほど地形はダイナミック。高さ 300～400m もの切り立った岸壁が迫り、圧倒された。



マラケッシュの市場

野菜や果実、肉をはじめあらゆるものが売られている。カタツムリも売られていた。





ロバとヤギ

街中では必ずと言ってよいほど、ロバに荷物を載せている姿を見ることが出来た。また、ヤギやヒツジがいたるところで目についた。



2. モンゴル冬営地

モンゴル国ボルガン県アルシャンツ遊牧民の冬営地において羊・山羊群の調査を行った。草原は白一色の世界。ザラ雪状態。覚悟していたよりは寒くはない。

放牧地は平均 -15°C ～ -25°C であったが、羊・山羊は雪を掻き分けて短い草を摂取していた。



3. The Central Museum of Mongolian Dinosaurs

モンゴル国のウランバートル市内にある恐竜博物館を見学。館内は小学生の親子連れでごった返していた。どの国の子供たちも恐竜が大好きなようだ。南ゴビ砂漠の恐竜の卵などの化石も見られ、それなりに楽しめた。



4. スイスの旅で見つけた 朝焼けのmatterhorn

スイスのmatterhorn。matterhornとは「草の角」という意味があるらしい。ホテルから朝焼けのmatterhornを眺めた。時間とともに刻々と移り変わる様は、人の一生を見ているようであった。わずか30分ほどの自然のショーにとれた。

サースフェーで見かけた穀物倉庫。ネズミなどの侵入を防ぐために平べったい丸い石が建造物を支えている。同じものをツエルマットでも見かけた。



アルプス氷河

ベルニナアルプスと氷河。目の前で見ることができ圧倒された。この氷河は年々後退しているそうです。ここにも温暖化の影響。

登山家の今井道子さんが登攀したアイガー北壁。アイガーの隣にメンヒ、ユングフラウが連なる。見事。





チューリッヒのホテル。朝食会場の天井にカリブーの角が沢山ぶら下がっていた。

ウエンゲン市内の路上で珍しいかたつむりを見かけ、思わずカメラに収めた。

ツエルマット市内のプランターにエーデルワイスが植栽されていた。

ウエンゲン、ツエルマットでは車の入場制限があり、いずれも電気自動車が行き交っていた。





5. 英国の旅

3月の英国ヒースロー空港は、卒業旅行と思われる大学生のグループで、ごった返していた。写真左は、機内からヒースロー空港上空を撮影。写真右は、世界遺産となっているウエストミンスター寺院。写真下は、大英博物館において、心に残った白馬。表情が何とも言えない。



嵐が丘

ハワースには、「嵐が丘」などで有名なブロンテ姉妹の博物館があった。写真上は、博物館の裏側から撮影。郊外では、今時珍しい電話ボックス（写真中左）、郵便ポストを見かけた（写真中右）。



湖水地方

ウインダム湖は船で遊覧を楽しめる（写真左）。近くにマスの養殖場があった（写真右）。

童話ピーターラビットで有名なビアトリクス・ポターの世界館（次ページ写真）。





コッツウォルズ地方

全英一古い街並みが保存されている村コンテストで何度も入賞しているカッスルクーム（写真左）。ストラトフォード・アボン・エイボンには、シェイクスピアの生家（写真右）、彼の妻が結婚式前に暮らしていたアン・ハサウエイの家があった（写真下）。いずれも 2016 年 3 月に現地撮影。



リバプール

英国リバプール。ビートルズが演奏活動した拠点。約 50 年前、世界の多くの若者が彼らの音楽の虜になり、エネルギーを生み出してきた。そして現在も老若男女を問わず、その音楽を共有している。文化遺産といってもよいだろう。

2016 年、英国リバプールにて撮影。



自然史博物館

英国ロンドンには博物館都市でもある。240 余りの博物館がロンドンに集まっている。しかも入場料が無料であり、チケット売り場に並ばなくていいことに驚き、感動する。

ロマネスク様式の建造物として有名な自然史博物館を訪れた。大英博物館の自然史部門が独立して 1881 年に設立された。館内の中央ホールでは全長 26m の大型恐竜ティプロドクス（写真上）が目に入る。天井部には植物画のパネルが施されている。館内は生命・地球・研究施設（ダーウィン・センター：写真左）の 3 フロアに分かれており、5500 万点に及ぶ標本類には圧倒される。展示の掘り下げ方に工夫があり（写真右：馬が草を食べる様子など）、興味深く見ることが出来る。自然科学のすべてがここにあるといってもよい。



大英博物館

世界三大博物館の1つ。収蔵品は約700万点。館内は圧倒されるくらい広く、1日かけても時間が足らなかった。写真撮影OKなのが嬉しい。

館内で一番大きい展示物が「人面有翼牝牛像」(写真左)である。アッシリア(現在のイラク北部)王国の魔除け守護神として城門に飾られた。頭部は人間、体は羽のある牝牛、力強さを表す動物。前から見ると2本足、横から見ると4本足の不思議な姿で作られている。

写真右は、頭髪の赤色からジンジャーと名付けられたBC3400年ころのミイラである。保存状態が良いのは、熱砂に埋葬されたために水分が吸収され遺体が自然にミイラ化されたもの。死者が左胸の心臓を守るような形で埋葬されているのは、当時のエジプトでは心臓が心を司る臓器と考えられていたためである。過去からの死者と現存する私たちと会話する時間帯になった。

写真下は、ムラッド・ライオン狩りのニルド遺跡から出土したレリーフであり、立体的かつ精緻な表現が施されている。BC9世紀のアッシリアのアッシュール・ナシルパル2世の宮殿を飾っていたもので、ライオン狩りの様子が描かれている。ライオン狩りは王の威厳を示すものであったという。矢に刺さったライオンの苦しむ細部の表情まで表現されている。

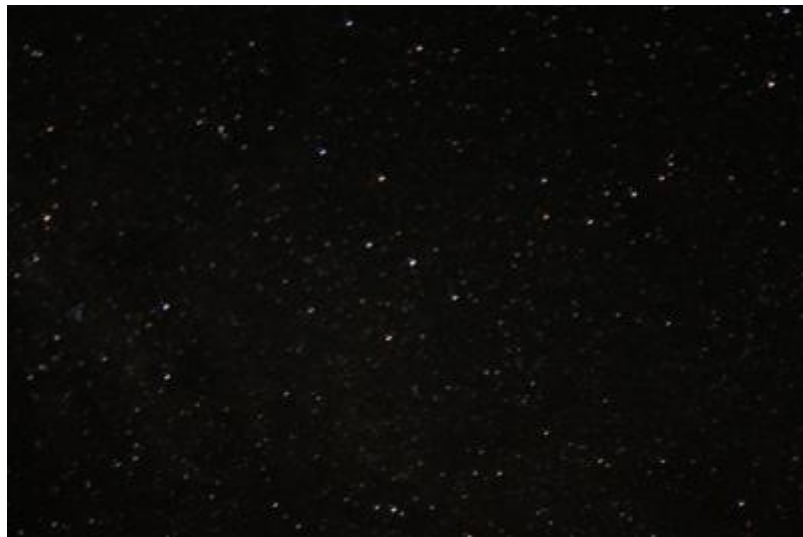
機会を改めて、ロンドンの博物館を訪れたいと考えた。写真は全てiPadで撮影。



6. モンゴル

星降る夜と天の川

時差が日本と変わらないモンゴル。しかし、9月の日没は午後10時過ぎ。月光が美しい。深夜、ゲルの外に出て夜空を眺めた。夜空を覆いつくす天の川を見ることができた。モンゴル草原の星空を見るだけでも来た甲斐がある。北斗七星や北極星もはっきりと見ることができ、何とも贅沢な夜を過ごすことができた。





冬に備えて

写真は、秋営地の後に移動する冬営地。牧草が少なくなる冬に備えて、牧草が冬営地の屋根に積み込まれていた。ダン（牛の糞を乾燥させたもの）が、うず高く積み重ねられ、燃料として冬の準備に備えられていた。冬営地は、積雪もあるため写真のような小屋に家畜たちを避難させて冬の季節を乗り切る。



ゲルの点景

ゲルの天井は日時計代わりにもなる。日が差し込み、おおよその時刻がわかるという。

ゲルの入り口は、南側にある。昔から南側になっているのは、伝統的に風を避けるためと陽射しが差し込むからだという言い伝えがあり、現実的、実際的であると考えた。

ゲル内から眺める外の光景が何ともたまらなく良い。

朝晩は、冷え込む。煮炊きする以外にも暖をとるためゲル内にストーブが置かれていた。



水の補給・確保

遊牧民の生活水は、草原内にある共同使用の井戸から定期的に補給する。地下水をポンプでくみ上げていた。家畜たちも、この水場にやってきて水分を確保していた。遊牧民のゲルの後ろには、大きな水入れの容器が置かれていた。





遊牧調査

羊・山羊群 717 頭の放牧行動調査を行った。車で追跡しながら 1 日約 10km の行程を調査。草原といっても、山岳地域まで追跡することがあった。





GPS・個体識別

遊牧民が所有する羊 470 頭・山羊 247 頭のうち羊・山羊各 10 頭に GPS を首輪に装着し、体の両側面に数字で個体識別。



モンゴル草原での出会い

調査中、草原をゆっくり歩くゴリョウに出会うことがあった。今回、草むらにモゴイ（ヘビ）を初めて見かけた。また、羊の死骸を見かけることがあった。死骸は、オオカミや猛禽類に食べられ、やがては風葬になる。



空と大地

モンゴル草原は、空と大地がつながり、遮るものがない。時間がゆっくりと流れていく。都会の慌ただしさがうそのようである。草原にいても湿気を感じることがなく、身体が不快に感じることなく過ごすことが出来た。遊牧民は、フレンドリーであり、初めて会う人でも親密に接触してくれ、快適な日々を過ごすことが出来た。



遊牧民の一日

モンゴル遊牧民の一日は、牛の乳搾りから始まって、複数回にわたる馬の乳搾り、山羊の乳搾りを中心に、放牧管理がある。その間、食肉にするための羊・山羊の解体が不定期に行われる。





モンゴル遊牧民と過ごした日々

遊牧調査のためモンゴル国ボルガン県アルシャンツの遊牧民の秋営地に滞在した。写真左は、ウランバートルから草原に向かう途中の道路である。遊牧民は、季節ごとに移動するため定められた住所がない。目的の居住地を特定するのに、何人もの遊牧民に聞きながら辿り着いた（写真右）。

ゲル（テント）の中は質素である（写真下）。生活に必要なもの以外はない。トイレ、風呂はもちろんない。大自然の中のアウトドア生活。



ウランバートルのザハ

ウランバートル市のザハ（市場）には、衣食住における新旧の品が数多く揃っている。ザハ内は、速足で回っても約3時間かかるほど、広い。

モンゴルでしか入手できないものがあった。写真左は、馬頭琴。写真右は、ヤク（左：ウシ科）ラクダ（右）の毛で編んだセーター。写真下は、松の実。松の実は、ウランバートル市内いたるところで口に入れて食べている人々を見かけた。

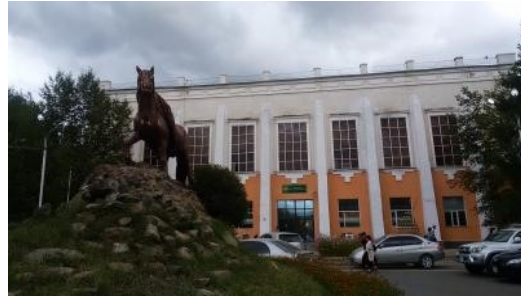


モンゴル生命科学大学を見学

モンゴル草原での研究調査後に、ウランバートルのモンゴル生命科学大学（旧モンゴル国立農業大学）を共同研究者の Dr. Myakhdadak らと見学する機会があった。

写真次ページ左は、ウランバートル市内を見渡せる高台から撮影したモンゴル生命科学大学の全景である。写真次ページ右は、大学正面建物入り口で見かけた馬の像。

大学の建物は回廊式の2階建てであり、動線を生かした機能性のあるものであった。近い将来、大学建物が高層化されるらしく校舎内の廊下に模型が展示されていた（次ページ写真下）。



モンゴル生命科学大学キャンパス内

Dr. Myakhdadag の案内で、校舎内を見学。新学期が始まっているらしく、教室間を行き来する学生の姿を見かけた。廊下には、学生が使用する教科書などが展示されていた。

壁面には、Dr. Myakhdadag が学生時代からあったというレリーフを見ることができた。見学中、会議に向かう途中の学長と副学長とすれ違い、Dr. Myakhdadag と挨拶を交わすサプライズもあった。





モンゴル生命科学大学キャンパス内の家畜像

キャンパス内の芝生には、モンゴルの家畜を象徴するヒツジ・ヤギ・ウシ・ラクダの像が設置されていた。



2015. 08. 30

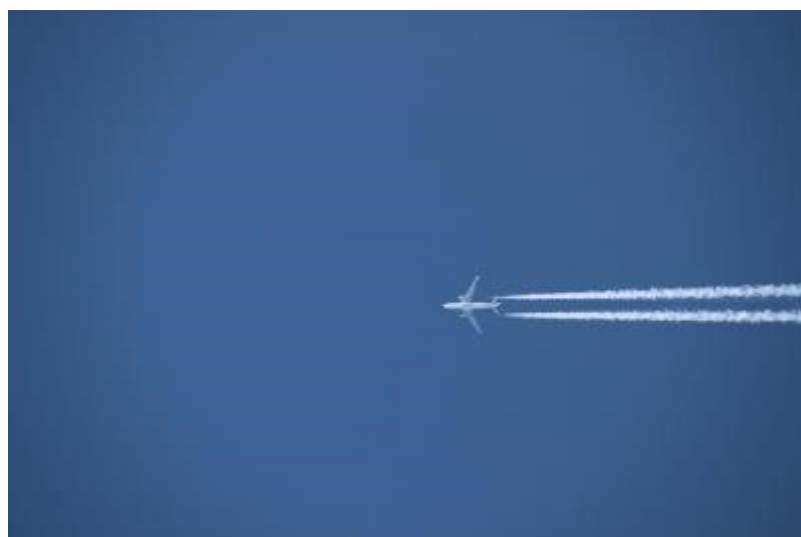
草原の輝き

この10年間で、モンゴル遊牧民のゲル内には、太陽熱発電（写真上）の利用により室内灯、テレビ、冷蔵庫などがみられるようになってきた。また、携帯電話、バイクや乗用車も所有するなど、情報通信手段が加速し、遊牧民の生活が向

上していく様子が見える。それでも異国の草原で暮らしていると毎日、時間が静止しているように過ぎていく。遊牧民が所有する羊・山羊は毎日約10kmの草原を移動していく（写真中）。調査中には、ジェット機がきれいな飛行機雲を作りながら青空の空間に軌跡を描いていくのを見ることができる（写真下）。この飛行機雲は、飛行機が飛ぶようになってからみられるようになった人工雲である。ジェット機から吐き出す塵と空中の水蒸気が反応して出来上がる、はかない自然現象である。

旅は非日常の時間と空間が体得できる心を魅惑する冒険には違いない。異国における旅の日常の中にも輝く瞬間がある。特に若い世代には、異国での一人旅を是非お勧めしたい。集団旅行では発見や自覚できない多くのことが学べる良い機会になると思う。

若い世代のみなさんへ。



7. 台湾

美麗駅

台湾・高雄市新興区にある地下鉄駅のひとつ「美麗島駅」の地下1階にある穹頂広場。「世界でもっとも美しい駅ランキング」で2位になった美麗島駅。4500枚のステンドグラスで構成された光のドームステンドグラスの美しさに圧倒。美麗島駅のステンドグラスの名前は「光之穹頂 (The Dome of Light)」。

イタリア人芸術家の Maestro Narcissus Quagliata さんが四年半もの歳月をかけ、すべて手作業でグラスを張り、完成させた作品で、水・土・光・火の4つが描かれている。宇宙の誕生、成長、繁栄と破壊などそれぞれストーリーが描かれている。目を引く真ん中の大きな赤と青の二本の柱。この二本が表しているのは世界です。青は「陰」であり生命を育む海を、赤は陽であり火山が噴火するような情熱が表されていて、世界はこの陰と陽の調和によって形成されているという意味が込められているそうです。直径30メートル、面積660平方メートルという世界最大のステンドグラスアート。4500枚ものステンドグラスの向こう側から差し込む光の透過の美しさと、ステンドグラスに込められている深い意味を考えた。美麗島駅で撮影。



千と千尋の神隠しの舞台

ジブリの映画「千と千尋の神隠し」のモデルと言われる街。台湾の九份。九份（きゅうふん、ジョウフェン）は、台湾北部の港町基隆の近郊、新北市瑞芳区に位置する山あい。九份の街並みは日本統治時代の面影を色濃くとどめており、当時の酒家（料理店）などの建物が多数残されている。この街が”千と千尋の神隠し”のモデルとなった街ではないかと騒がれた。

「千と千尋の神隠し」は、日本の神話のような世界に少女が迷い込んでしまい神や妖怪とのやり取りの仲で両親を助け人間のエゴに気づいていき成長していくというストーリーでした。実際に歩いてみました。特にその幻想的な風景や街並みが確かに似ている。

九份で最も印象的なのは、豎崎路と呼ばれる階段道。九份茶坊から階段で下るとき、この道はとても幻想的に見える。まるで「千と千尋の神隠し」の世界に舞

い込んだような気分になる。九份茶坊近くの元映画館入り口で、不思議な懐かしい空間を味わった。写真は、いずれも九份で撮影。



8. ドイツ・チェコ

ベルリンの壁は、冷戦の真っ只中であつた 1961 年にドイツ民主共和国政府によって建設された、西ベルリンを包囲する壁である。1989 年に破壊され、1990 年 10 月 3 日に東西ドイツが再統一されるまで、この壁がドイツ分断や冷戦の象徴となつたことで知られている。ベルリンの壁は、「冷戦」「越えられない物」「変えられない物」の象徴だつた。写真左はベルリンの壁。現在は一部がモニュメントとして残されている。写真右は、壁が撤去された後の路面に残された刻銘。1961-1989 と刻印されている。写真下は、ドイツの国境を超えて、ポーランド、チェコ、オーストリア、スロバキア、ハンガリーを廻つた時、チェコのチェスキー・クルムロフで撮影。オーストリアとの国境近くにある美しい町で、ヴルタヴァ川に抱かれた中世の雰囲気が残されており、ゴシック、ルネッサンス、バロック建築が混じり合つた複合建築がみられた。

旅は、帰れる（帰る場所がある）から楽しいのであり、どこにでもあるような土産までを買ってしまうのは、帰る場所（人）に届けたい気持ちの現れであろう。国内における日常生活の中にも旅があり、発見はある。しかし、時には国外に出て日本国を見直す機会を設けることは大切であるように思う。毎日の生活に追われている（？）自らを振り返る良い機会にもなると思う。



9. トルコ

トルコのアナトリア地方は、カッパドキアと呼ばれており、奇岩群が見られる（写真次ページ左）。これは太古の昔、火山噴火によって堆積した溶岩や火山灰が、長い年月の間に浸食されたもの。ユルギップトという町では、キノコの形をした煙突状の奇岩を見ることが出来た。写真次ページ右は、洞窟内のレストラン。この中のホテルに宿泊したが快適に過ごすことが出来た。バイキング料理ではイチジクと巣のついたハチミツを賞味したのが印象的に残った。なだらかな丘を越えると白い綿状の塊をした大地が現れてきました。パムッカレです（次ページ写真下）。パムッカレとは、「綿の城」の意味で、かつて綿の産地であったことに由来するのだそうです。美しい石灰棚でできており、温泉に足を浸すことが出来る。自然の神秘を味わった。



トルコの絨毯

絨毯の織り方には一重結びと二重結びがあり、2重結びは耐久性に優れていて100年以上は使えるそうです。この2重結びの織り方で絨毯を作っているのはトルコのみだそうです。

次ページ写真左は、パターンを見ながら現地の女性がひとつひとつ丁寧に織っているところです。トルコ絨毯の素材はウール100%、シルク100%、ウール×綿の混紡、化繊など(次ページ写真右)。トルコ絨毯といってもピンからキリまで、織り方・素材・染め方により違いがあるようです。とくにシルク(次ページ写真下)からつくる絨毯は高級なのだそうです。

写真はいずれもカッパドキアで撮影。



10. カンボジア遺跡群と巨木

カンボジアのアンコール遺跡群は、熱帯の自然の中で崩壊の危機にさらされています。崩壊の要因の一つは雨水にあるそうです。建物のほとんどには、水分を吸収しやすい砂岩が用いられている。雨期に毛細管現象で水が柱の内部にまでしみ込み、乾期には灼熱の太陽に熱せられ、劣化して表面から徐々に剥離していくのだそうです。2つめは、大きく成長するガジュマルの根が絡みつくように石積みの隙間に入り、浮き上がらせている。12世紀末に仏教寺院として建立されたタ・プロームは、東西約1000m、南北約700mの壁に囲まれた広大な遺跡であり、アンジェリーナ・ジョリー主演の映画「トゥームレイダー」のロケ地としても有名。大蛇のようにうねりながら遺跡を押しつぶしそうな勢いのガジュマルの姿に目が留まった。巨木のガジュマルが遺跡を浸食しているように見えて、支えているようにも見える。ガジュマルに浸食され、その大半は修復がままならない状況下ですっかり廃墟と化したタ・プローム。この石を締め付けている巨木を

さらに絞め殺すガジュマルが、網の目状に多数の根を絡めている壮絶な光景も一部で見られる。これはガジュマルそのものではなく、ガジュマルの近縁種のようなです。ガジュマルに絡まれた樹木は、やがて死滅していくのでしょうか。凄い生存競争を目のあたりにしました。旅の発見です。

写真はいずれも 2013 年に撮影。





11. スペイン

スペインのバルセロナにあるサグラダファミリア大聖堂(次ページ写真左)は、有名な建築家ガウディが設計して1882年に歴史がスタートしたが、工事中で未完成。しかし、つい先日ガウディ没後100年の節目となる2026年に完成されると発表された。3つあるファザードのうち「生誕のファザード」は、現在、日本人の外尾悦郎氏が担当しているとのこと。このファザードの柱を背負っているカメの姿に思わず目が留まった(次ページ写真右)。ファザードに降りかかった雨が柱の中を通りカメの口から出てくる仕組みになっているようです。足元にも目を向けることが大切です。

次ページ写真下は、歴史的城塞都市クエンカ市内にあるウエカル川の断崖の上に建てられている「宙吊りの家」で、世界遺産に登録されている。自然と人工物のユニークな組み合わせになぜか拍手。



スペインの街角で見かけた食材

スペインのトレド市内で見かけた手作りのパン販売所 (写真左)。日本語でも書かれていた。写真右は、バレンシア市内の市場で見かけたウサギの肉。店員が Conejo (ネコ) と発音していたので、聞いてみたら何とウサギの肉であった。また、大きなナスやパプリカなどが豊富に並べられており、旅にはこのような食材との出会いがある (次ページ写真下)。





12. イタリア

イタリアのフィレンツェ市内を散策している途中で、アスファルトにアートを施しているアーティスト達の姿があった（写真左）。決められたスペースに描いているように見受けられ、街のいたるところでアーティストたちの作品を垣間見ることができた。旅にはこのような発見がある。

ナポリからアマルフィ海岸へドライブ。訪れたのは12月であったが、春のような陽射しで心までも温かくなったのを思い出した。途中立ち寄ったポジターノでは路上販売の柑橘類が販売されており、地中海性気候の恵みを感じた（写真右）。またエメラルドの洞窟を訪れた際、太陽光が海中に差し込み、青色だけが力強く水中で屈折を続けながらどこまでも広がっていく光景に自然の神秘を感じた（次ページ写真下）。





ポンペイの大噴火

大噴火当時のポンペイの様子を知りたくて遺跡を見に出かけた。ポンペイ遺跡は西暦 79 年 8 月 24 日、イタリアのベスビオ山の大噴火で発生した火砕流で、当時 1 万 2000 人が暮らしていたポンペイ 市民は一瞬のうちに生き埋めとなり、現在では世界遺産となっている。

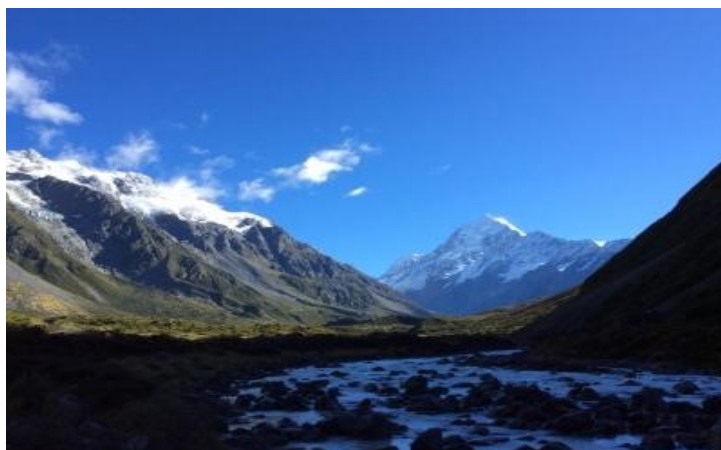
ポンペイは長い間封印されていましたが、1748 年に再発見され建造物の完全な形 (写真左) や当時の壁画を明らかにするための発掘作業が行われたそうです。発掘された当時、火山灰の中は、遺体部分だけが腐ってなくなり空洞ができており、考古学者たちはここに石膏を流し込み、逃げまどうポンペイ市民が死んだときの形を再現しました (写真右)。石膏の人型は、一瞬にして平和な日々を奪われたポンペイ市民の悲劇を伝えている。ポンペイの遺跡は、はかない人間の宿命を物語っている。ナポリでは「キリストの涙」という名前の白ワインが何故か印象に残っている。このワインは、ナポリの南東に位置するヴェスーヴィオ山麓地域の葡萄の樹に、キリストの涙がかかったため素晴らしいワインができるようになったという伝説からワイン名が付けられたという。旅の最終日のローマ市内ではイタリア紀行を振り返りながらカンツォーネデイナーを楽しんだ。





13. ニュージーランドのアウトドア

旅は心を魅惑する冒険には違いない。自然、風土、人、文化との触れ合いから多くを学ぶことが出来る。旅で学んだことや考えたことを日常生活に還元していくことで、明日への活力につながると思う。ニュージーランドは、地球上の様々な環境が凝縮されている地域の1つといえる。氷河や緑の濃い森などに直接接触れる体験は観光地周遊に飽きた人にとっては、実に刺激的だ。南島にあるマウントクック（標高 3754m）は、世界遺産に指定され、氷河や氷山など雄大な眺めである(写真)。iPad で撮影。



ワイタケレ森林公園(次ページ写真左)は、数少ない手つかずの自然が守られた場所であり、ニュージーランドの象徴ともいべきシダ植物をはじめ、樹齢数百年以上のカウリの樹木を見ることができる。大自然体感ポイントとしては、苔むした独特の風景(次ページ写真右)が広がる。



原生林が茂るキャズムでは急流によって浸食された奇岩群(写真5)を見ることが出来る。

レイクガンの森をウォーキング(写真左)、奇岩を見ることが出来た(写真右)。

写真下はミネラルやビタミンが豊富に含まれた現地の「MANUKA TEA」であり、ハチミツと共に土産には良いと思う。ニュージーランドの上記の場所は、アウトドア派にはお薦めの場所である。



14. ポーランド アウシュビッツ・ビルケナウ

「ARBEIT MACHT FREI」働けば自由になる文字が掲げられたゲート。当時、収容者は、どんな気持ちで、この門をくぐったのであろうか。想像を絶する記録が、この施設内に遺産として残されていた。

学生時代にフランクルの「夜と霧」を読んで、機会あれば是非この施設を訪れてみたいと考えていた。まる1日の行程であったが、「人間の生命は常にいかなる事情の下でも意味を持つ」と述べたフランクルの言葉をかみしめた。



15. フランス バルビゾン ミレーのアトリエ

フランスへ旅に出かけた。パリを起点とした旅であった。サルトルなどの文化人が出入りしたレストランにおいて、名物のカキ料理に満足しながら郊外のバルビゾンに出かけることを夢見ていた。ミレーの生家とアトリエを見たいと考えたからだ。

バルビゾン村では、農夫の心を持ったミレーに限りなく親近感を抱いた。有名な落穂ひろい、晩鐘、種をまく人などは、この地で生まれている。

アトリエを訪ねて、ミレーの絵に改めて宗教的なものを感じた。



国内編

1. 八幡平の大沼

八幡平の大沼周辺を散策。ここにもクマ出没の看板。湿原周辺にはアオモリトドマツ、ミズナラ、ブナ、ダケカンバなどの大木が見られた。沼から岸に向かってミツガシワ、ヨシ、ヌマガヤ群落が並んでいて湿原化の様子が良く理解できる。宿の部屋からながめたブナ林。ゆったりとした時間が流れた。



玉川温泉の岩盤浴

自然研究路には地熱のある岩場があった。岩盤から発する地熱を体内に取り入れる温熱浴。微量の放射線や大量のマイナスイオンなども含まれ、新陳代謝の促進が認められているそうです。早速体験。汗が吹き出し、体が熱くなった。玉川温泉は、毎分 9 千リットルという湧出量があるそうです。湯の川と噴気孔など目の前に見ることができた。近くには、ひなびた野天風呂の蒸けの湯があり、入湯体験。心まで開放された気分になった。



焼山周辺を巡る

八幡平の焼山周辺には、湯治場で知られている玉川温泉があった。強酸性（pH1.2）の温泉水という点では日本一だそうです。大噴と呼ばれる源泉湧出口や源泉からの熱湯が幅3mの川となって湯の川となっています。

次ページの写真は、一軒宿の彩雲荘の泥湯。海拔1400mに位置する秘湯。泥湯に浸り、至福のひとつときでもあった。





焼走り溶岩流

標高 2038m、日本百名山の岩手山。北東斜面は火山砂礫で覆われた美しい裾野。1732 年の噴火の際、流出した溶岩が東北方向へ 3.4km まで至り「焼走り溶岩流」となったそうです。近くでオニヤンマを撮影。道路の標識には、なんとクマ出没の看板があった。ツキノワグマが出るのでしょうか。



2. 三重県立総合博物館

三重県立総合博物館を見学する機会があった。博物館は、地域の歴史・風土、自然環境、文化など、人との関わりを教えてくれる。ミエゾウの化石を見ることができた。大台ヶ原のジオラマと地域の人々の映像は見ごたえのあるものであった。



3. 三重県久居駅前

近鉄名古屋線の久居駅前。偶然にも、上野博士とハチ公像を見つけた。博士は、この地域と関わりがあったのですね。



4. ハチ公と上野英三郎博士像

東大農学部構内。学会の折に「ハチ公と上野英三郎博士像」を記録に収めた。



5. 上野公園の桜

上野公園一帯は、桜見物の人出でごった返していた。





人生の扉

時は春。桜が満開。上野公園は、外国からの観光客を含め、多くの人が行き交っていた。桜の下では、会社や大学はじめ、町内会、家族、グループが宴を楽しんでいた。この中には、新社会人や学生も含まれていたに違いない。

春がまた来るたび ひとつ年を重ね
目に映る景色も 少しずつ変わるよ (中略)

I say it's fun to be 20
You say it's great to be 30
And they say it's lovely to be 40
But I feel it's nice to be 50

満開の桜や 色づく山の紅葉を
この先いったい何度 見ることになるだろう
ひとつひとつ 人生の扉を開けては 感じるその重さ
ひとりひとり 愛する人たちのために 生きてゆきたいよ
(竹内 まりや 「人生の扉」より)

上野・国立博物館では、生誕 150 年の回顧展「黒田清輝」展が開催中であった。

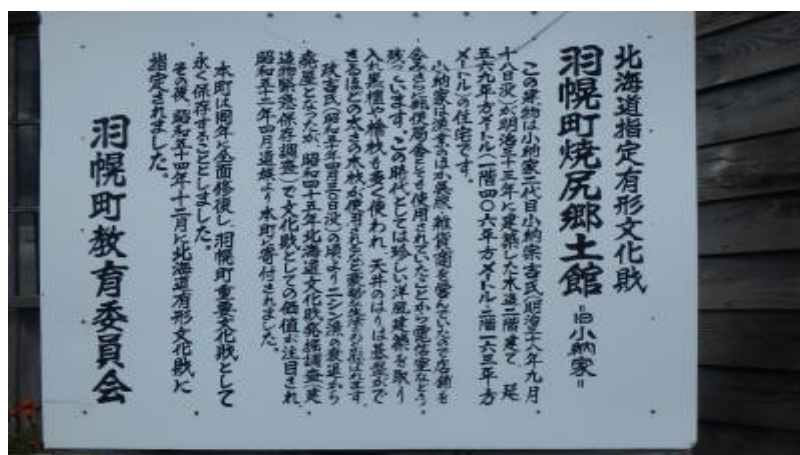




6. 北海道 焼尻島 島の学校、郷土館

焼尻島には、小中学校が1校、郷土館が1館ある。小学生が4名、中学生が1名の過疎校です。教職員数は約2倍、学校のグラウンドは海に面した位置にある。きっと充実した教育が行われているのだろうと考えた。

郷土館（旧小納家）は、道の指定有形文化財となっており、先人の足跡が学べる貴重な建造物である。見ごたえのある展示がいくつもあった。



連絡船

焼尻島の西端には、海鳥の繁殖地で有名な天売島が手に届くように眺めることができる。連絡船で約35分。平坦な島です。北方に利尻島が見えた。



オンコの原生林

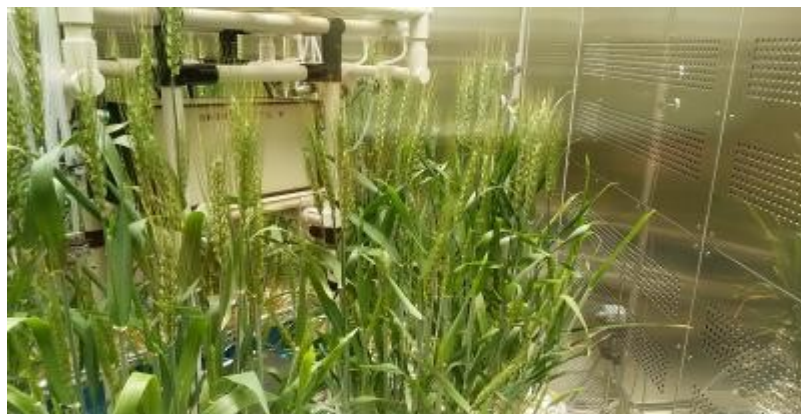
北海道・焼尻島には、オンコ（イチイ）の原生林がある（次ページ写真左）。うっそうと茂った原生林を歩くと、ところどころに変形したオンコをみることができた。鶴と亀の形をしたオンコがあった（次ページ写真右）。

オンコの木は、本来20mほどに成長するが、ここ焼尻島では、積雪や風の影響により低く地を這うような育ち方をしている。自然の厳しさとそれに適応する木々の生命力の強さを肌で感じる事ができた。焼尻島にて



7. 鳥取大学乾燥地研究センター

研究発表会のため、鳥取大学乾燥地研究センターに出かけた。鳥取砂丘にあり、文字通り沙漠などを課題とした研究センターとして名が知られている研究機関である。写真左のアリドラボ（発表展示場）、写真右のアリドドーム（植物温室）の他、乾燥地植物気候変動応答実験設備施設内には、温湿度、光、炭酸ガス濃度などの環境条件を制御でき、精密な実験条件で実験を行うことができる実験プラットフォームなどがあつた。この施設内では LED を使用したコムギ栽培の実験が行われていた（写真下）。



旅の発見

「旅は、心を魅惑する冒険には違いない。そこから多くを学んだし、これからも学ぶだろう」辻邦夫 海そして変容より。

鳥取駅裏通りの郷土料理店で食事をした。思いもかけず小さな発見があった。その店に関わりのある人のメッセージと出会ったからである。本業は医師。鳥取の民芸のプロデューサーとして名前が知られているらしく、隣には美術館を建設するなど芸術家としての生涯を貫いたという足跡が記されていた。1人の人の生き方に思いを巡らしたひと時でもあった。



8. 湯島天神

学問の神様である東京・湯島天神に行ってきた。
イヌの絵馬に思いを託してお祈り。すでに梅が開花。良い1年でありますように。



9. テラスモール湘南ひろばの七色の輝き

12月には、各地でイルミネーションが楽しめる。
LED電球が一斉に発光。瞬く間に点滅。次の瞬間、鮮やかな色に変化。光の変化を楽しめた。それにしても美しい。テラスモール湘南ひろばにて撮影。





時間を追いかけて撮影。美しい七色の変化。家族連れが写真を撮っていた。テラスモール湘南ひろばにて。



10. 青の輝き・光の点滅

八重洲地下街の天井から青の輝き



11. 湘南・浜降祭

海の日（7月17日）。湘南海岸では恒例の浜降祭があった。茅ヶ崎市・寒川町の神社30数社の神輿が暁に各神社を宮出して、茅ヶ崎市西浜海岸の祭典会場に向かう。祭典後に、海に入る神輿もあれば、そのまま再び各地域まで神輿を担ぎながら戻るなど、地域を渡御する祭りで、暁の祭典とも呼ばれている。浜降祭が始まると、いよいよ夏の到来ですね。



神輿が海に入る「みそぎ」

浜降祭のいわれは、今から170年ほど前の天保9年（1838）、寒川神社の神輿が、例年春に行われる国府祭（こうのまち）【大磯町国府本郷】に渡御した帰途、

相模川の渡し場で寒川の氏子と地元の氏子が争いを起こし、川に落ちて行方不明になる。その数日後、南湖の網元である孫七さんが漁の最中にこのご神体を発見し、寒川神社に届けたことを契機に、毎年同神社の神輿が、そのお礼のため南湖の浜に赴き、「禊（みそぎ）」をするようになったと言われている。

以下の写真は、神輿が海に入る「みそぎ」の場面。



神輿が海に入る「みそぎ」Part2

神輿が海に入るのを見ることができたのは、お発ち（式典後一斉に神輿が動き出す）の後の午前8時過ぎであった。



神輿が海に入る「みそぎ」 Part3

「どっこい、どっこい」という掛け声は、相州神輿独特なもの。



神輿が海に入る「みそぎ」 part4

掛け声だけではなく、神輿を担ぐ時に歌われる「茅ヶ崎甚句」が聞こえてきた。





神輿が海に入る「みそぎ」 part5

神社によって神輿の担ぎ方が違う。



12. 大山街道 二子新地～溝の口を歩く

文人画家である渡辺崋山が天保2年(1831)、絵の弟子の1人を連れて江戸を出立し、目的地の厚木村(現在の厚木市)に向かう記録が「游相日記」にある。二子玉川から多摩川を超え、川崎市の二子新地から溝の口を経るくだりがあったので、二子新地から溝の口に至る大山街道界隈を歩いてみた。現在の多摩川のほとり二子新地に岡本かの子「誇り」モニュメントがあった(岡本かの子は、画家岡本太郎の母である)。また、江戸時代から大山街道沿いに文化の街として発展した高津には、いくつもの私塾が基になってできた高津小学校があった。この近くに、高校から大学時代に住んでいたことがあり、懐かしい気持ちであった。



岡本ガの子文学碑

この碑は地元有志の発意により前衛的な画家・彫刻家の岡本太郎、建築家の丹下健三等の協力を得て昭和37年(1962)11月に建てられたもので、岡本太郎がモニュメントを製作し、丹下健三が台座と装山を設計しました。この碑は岡本太郎が、父、岡本一平と田、ガの子がこよなく愛したこの地、二子の多摩川のほとりを懐かしみ、本人が「語り」と命名しました。

また、岡本ガの子の業績を讃える文芸評論家・思想家の亀井勝一郎の文を、小説家、川端康成の直筆によって刻んだ碑が「語り」の横にあります。

高津観光協会・高津区役所



上田家と大山街道ふるさと館

近くには、明治の民権運動の拠点の1つであった上田家の建物があった(上田家の子孫は農大卒と聞く)。溝の口方面に向かうと、街道沿いに「大山街道ふるさと館」があり、今回歩いた中で、いくつもの発見と出会いがあった。





13. 星野道夫の旅

銀座 M デパートで開催中の星野道夫展 2016. 09. 01 を見学。写真家・星野道夫は 1996 年取材先のカムチャッカ半島クリル湖畔でヒグマの事故により急逝。逝去してから 20 年という節目に、写真 250 点、カメラやカヤック、スノーシューなどの愛用品が展示された。

星野道夫は、アラスカや野生動物、そこに生きる人々の暮らしを、写真と文章を通して自然と人間との関わりを伝えようとしていたことが作品から伝わってくる。

大自然と対峙し、時間と空間、静と動、生と死、瞬間と持続、無機物と有機物、これらの境界を考えさせるメッセージを遺している。



14. 小田原 Watching 提灯、像、鈴

小田原市 Watching。歴史、風土、文化が反映されている。駅改札口の入口には、大きな「小田原提灯」がある。童謡「おさるのかごや」に登場する。ディスプレイ用に大きめに製作されたものであり、実際はこれより小型のものが使用

されている。東海道の宿場町であった小田原では、旅人が携帯するのに便利なようにと、同地在住の職人・甚左衛門が、畳んだ時に胴の部分が蓋に収まるように作ったのが最初といわれている（写真左）。

南口には、2003年に小田原駅が改築され橋上化された際、デッキに尊徳の像が新しく立てられている（写真右）。通りがかりに見かけ、こんなところにと思わず写真に収めた。

南口の裏通りには、北条氏政・氏照の墓所があり、多くの鈴がつけられていた（写真下）。小田原市の指定史跡になっている。

また、南口には、M屋のアンパン（大きい!）、Y屋ベーカリーの12色アンパン（こちらは小さなアンパン）があり、地元では有名なアンパンの店となっている。駅ナカには、小田原産の金目鯛の煮つけがおいしいU国がありました。小田原は、食べ物も楽しめる。



15. 厚木市七沢

七沢の昆虫展示室

本厚木からバスで約40分。七沢にある昆虫展示室を見学。この昆虫展示室には小さな自然がある。昆虫展示室には、四季に合わせた丹沢の昆虫標本が展示さ

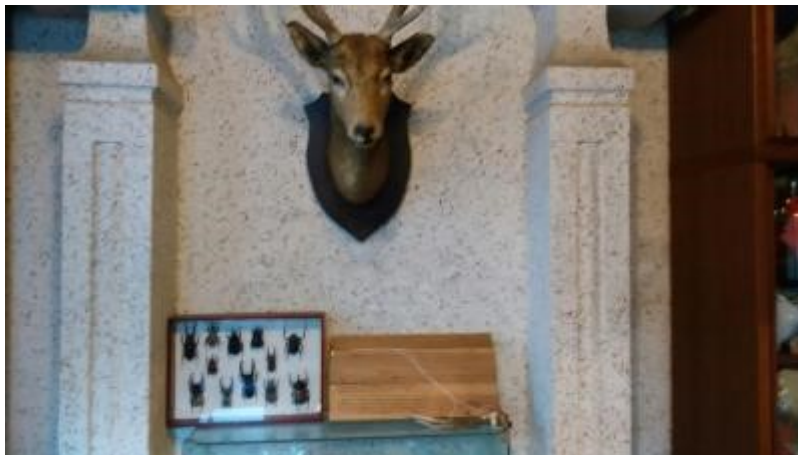
れている。丹沢の昆虫だけでなく、猪グッズコレクションや昭和初期の真空管蓄音機、当館の開業当時の写真が展示されていた。移り変わる時代の流れを感じることができ、懐かしいノスタルジックな空間を味わうことができた。

身近なところで、意外な発見があった。





館内にはシカ、キツネ、イノシシの剥製展示



ゼロ磁場

2つの地層が左右から押し合うことで、磁場がゼロに近い状態になるという「ゼロ磁場」が厚木市の七沢荘にある。

七沢荘は、天然温泉旅館で、温泉はとろりとした肌触りの強アルカリ泉、美肌の湯と評判だそうだ。「ゼロ磁場」があるのは源泉付近。そこにいるだけで、癒しの効果があるといわれている。



16. See、Look、Watch

See ぼんやりと見る。

日常生活のほとんどを占める。被写体が網膜に映されるだけで、記憶に残らずに通り過ぎてしまうことが多い。

Look 注意して見る。

See から一步進んだ段階。

継続性が問題。

Watch 心に留めて見る。

Look からさらに進んだ段階。

集中度が高く、その場に立ち止まり見続けていく。記憶の定着もある。

観察には、上記の3段階があるように思う。記録は、振り返ることにつながる。

写真上は、六本木ヒルズで通りすがりに見かけたオブジェ。気になって撮影。あとで見たら、有名女性デザイナーの作品であった。

写真中左は、JR 淵野辺駅の改札口で何度も見かけるうちに撮影。近くに JAXA があることに気づかされた。

写真中右は、茅ヶ崎市の水田で通りすがりに撮影。今年孵化したカルガモの行列。わずか10秒間のシャッターチャンスを生かすことができた。See, Look, Watch には、つながりと連続性がある。いずれもスマートフォンで撮影。



17. 鎌倉八幡宮 大銀杏のその後

鎌倉八幡宮のシンボルであった大銀杏が 2010 年 3 月 10 日の強風により倒伏してから 7 年。推定年齢 1000 年、高さ 30m、幹の太さが 7m。

現在は再生作業が進められており、親木から生えた若芽である「ヒコバエ」を生育している。先日、親木と「ヒコバエ」が生育しているところをカメラに収めた。



18. 六義園の桜

東京・駒込の六義園のしだれ桜を鑑賞。見ごと。



しだれ桜

しだれ桜は、エドヒガンという桜の品種の中で、枝が柔らかいため垂れながら成長していく種類といわれる。

六義園のしだれ桜は、樹齢70年、高さ15m、幅20mと大きく、形も良く成長している。ライトアップは4月6日まで。





19. ケヤキ並木が素敵なキャンパス

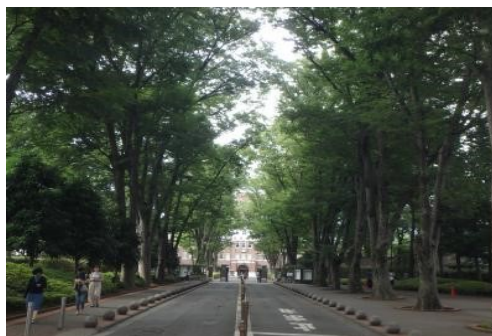
ケヤキ並木が素敵なキャンパスを訪れる機会があった。

写真左は、東海大学湘南キャンパスのケヤキ並木。圧巻です。平塚市の景観重要樹木に指定されており、構内いたるところにケヤキが植えられている。

写真右は、成蹊大学（吉祥寺）正門前のケヤキ並木。

次ページ写真は、青山学院大学工学部（相模原市）正門からのケヤキ並木。

並木のあるキャンパスは素敵だなと思った。





20. 都会のオアシス

都立E高校を訪問した。正門から入ると、きれいなイチョウ並木があり、右手には、手入れの良くいきとどいた西洋庭園とすてきな図書館が目に飛び込んできた。事務室前には、ヒマラヤスギとモッコクがあり、都内にも緑に囲まれた高校があることを実感した。



動植物に囲まれた校内

都立E高校内には、「危険な生き物が発生しています」と書かれた案内板が写真入りで目に入った。それだけ自然豊かな証拠であろう。動物の飼育や植物の栽培など、授業の実験観察で用いる教材は身の回りに多く見かけた。鳩舎があるのは、なぜか懐かしい気がした。中学。高校時代に飼育していたことがあったからだ。

生徒が作成した動物の骨格標本が校舎内に展示されていた。動植物が本当に好きな生徒たちが通っている高校であることを実感した。うらやましい。



21. 文京区さんさき坂

文京区さんさき坂に菊見せんべい総本店があった。明治8年創業という老舗。四角いせんべいが名物で、多くの文豪にも愛された味だそうです。

さんさき坂を上がると、2階建ての長屋が現れた。長屋の一角が招き猫の谷中堂になっている。手作りオリジナルの招き猫やグッズ売られているお店。坂の右側には、千代紙と和文具、縁起物の張り子など江戸民芸小物で有名なお店があった。江戸後期の元治元年（1864年）創業という老舗です。

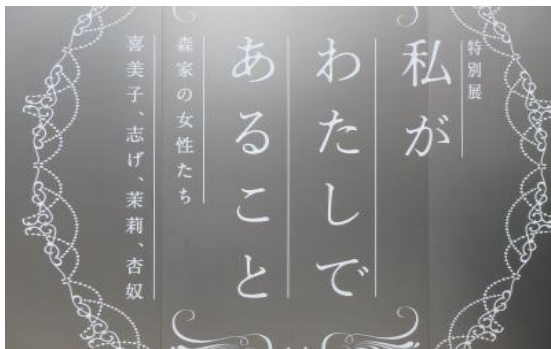
新たな出会いと発見があった。





森鷗外記念館の特別展「私がわたしであること 森家の女性たち 喜美子、志げ、茉莉、杏奴」が展示されていた。それぞれ森鷗外の妹、妻、娘たち。妻として家庭を守り、母として子供を育てるという役割を担いつつ、創作活動に関わっている。また、自身の成長とともに、文学的な才能を豊かに開花させていく。4人の「わたし」を辿る時間と空間でした。この記念館は、森鷗外の旧居「観潮楼」跡地であり、正門の礎石と敷石が残っていた。

かつて観潮楼からは品川の海がみられたとのこと。観潮楼前を西から東へ下る坂は、団子坂と呼ばれている。団子坂の由来は、坂近くに団子屋があったともいい、悪路のため転ぶと団子のようになるからともいわれている。森鷗外の「青年」や夏目漱石の「三四郎」などにも登場する坂。



22. 谷根千 寄り道・散歩道

東京下町歩きの殿堂ともいうべき谷根千（谷中、根津、千駄木）を訪れた。

日本医科大学敷地内に夏目漱石住居跡があった。碑の題字は川端康成によるもので、猫の家と呼ばれる散歩コースになっているようです。奥の扉には、猫の像があった。

谷中霊園に寄ってみた。東京三大霊園に数えられるこの霊園は、桜の名所としても知られている。霊園内中央のさくら通りがつくる桜のトンネルは毎年多くの人を魅了しているそうです。

交番の裏手に幸田露伴の五重塔のモデルになった天王寺五重塔の跡地があった。



23. 早稲田実業周辺

JR 国分寺から徒歩5分ほどのところに、「ペンシルロケットの水平発射」が行われた記念碑が建立されている。記念碑には、「1955年4月12日この地において東京大学生産技術研究所の糸川英夫教授を中心とした若い研究者によって日本の宇宙開発を告げるペンシルロケットの水平発射が行われた。その50

周年を記念してここに建立する」と刻み込まれていた。

興味深いことに、この記念碑の地下には2005年に子供たちが夢見た「50年後の宇宙ロケット」のデザインや当時の人々から「50年後の人々へのメッセージ」がタイムカプセルに収められ、埋められている。

ペンシルロケット発射から100周年にあたる2055年4月吉日に宇宙航空開発機構、早稲田実業学校、国分寺の有志の立会いのもとで、このカプセルが掘り起こされるという。

2055年4月に思いを馳せてみましょう。

数m横には、王貞治選手の「ホームラン世界記録達成」の記念碑があった。



24. 多摩川を眼下に

青梅市立 A 中学校は、多摩川を眼下に見下ろすことができる、自然に恵まれた環境にあった。校舎内には、技術家庭の授業で行っている植物栽培の様子を見ることができた。全校生徒 300 人、1 クラス平均 35 人の中学校。中学 1 年生のクラスは 1 クラス 30 人以下で構成されていた。中 1 ギャップに対応するためと校長先生が説明してくれた。



25. 御茶ノ水から万世橋へ

太田姫神社、かつては一口（いもあらい）稲荷神社と言われ、穢れや災いを洗い清め特に疱瘡に特効があると人々に崇められた社と案内板に記されていた（次ページ写真左）。坂道を下っていくと、「御成道」の案内板があった（次ページ写真右）。この場所は、江戸城外郭門の1つ筋違御門のあった所で、江戸城から上野寛永寺に通じることから「御成道」と呼ばれるようになったそうです。ここに江戸時代に賑わった万世橋停車場が設けられ、繁華街の1つとなった。

かつて中央線神田～御茶ノ水間に「万世橋駅」があったことをご存知でしょうか？ 1912（明治 45）年に完成した赤レンガ造りの万世橋高架橋が、歴史や記憶を活かしながら新たに生まれ変わった。

現在は、階段、壁面、プラットホームなどの遺構がよみがえった空間の中に知的好奇心を掻き立てるような趣味性、嗜好性の高いショップやカフェが並ぶこれまでにない商業施設になっている（次ページ写真下）。右側は神田川。新たな発見。



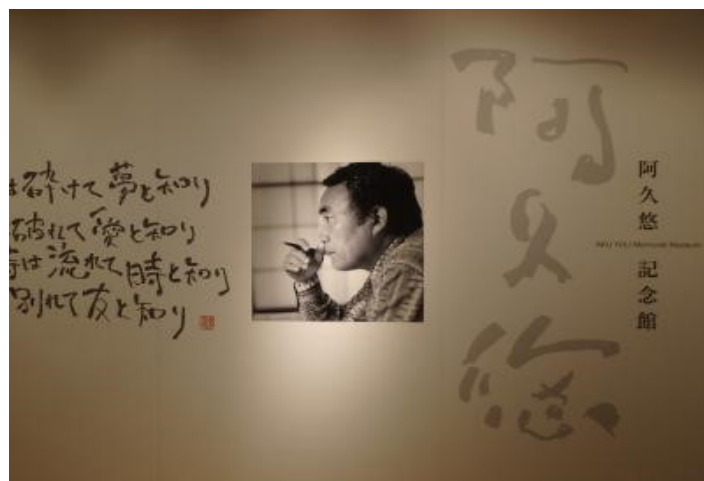
26. 明治大学博物館

御茶ノ水の明治大学博物館で特別展「2016. 04. 24」を見学する機会があった。冒険家・植村直己・単独行」を見に出かけた。植村がエベレスト登頂時に使用した装備やザック、山岳部の先輩や友人に宛てた手紙、自身が撮影した写真などが展示されていた。

植村は、43歳の誕生日に北米最高峰のマッキンリーに単独登頂に成功。しかし翌日の無線交信を最後に、消息を絶ってしまう。捜索を行うも本人は見つからず、大量の装備と山頂に残された旗が回収された。展示は、植村の「単独」での冒険に焦点をあて、なぜ単独なのか、そのためにどう冒険を組み立てたのか、43年間の足跡を紹介している。とくに、植村が明治大学農学部農産製造学科(当時)に入学したことに、なぜか親近感を抱いた。

見学を終えて、突き当たりの廊下に阿久悠記念館があったので入ってみた。阿久悠は日本を代表する作詞・作曲家であり、数多くの歌謡曲の作詞を手がけたことで世に知られている。阿久悠の生い立ちの展示を読んで、新たな発見があった。

阿久悠は教職課程を履修し、卒業後は祖父の実家の宮崎県で教員になる予定でいたところ、就職先は広告会社に決定してしまう。入社した広告会社で出会った人の影響を受けたことが、その後の阿久悠の人生を方向づけたという。誠に人生とはわからないものである。



植村直己展と阿久悠記念館の展示の後に、地下に降りて明治大学博物館を見学した(2016.04.24)。明大コレクションのみならず、古い時代の授業の様子を再現した教室の展示があるなど、思ったよりも興味ある常設展示であった。考古のコーナーには、稲作文化の紹介があり、ここにも新たな発見があった。



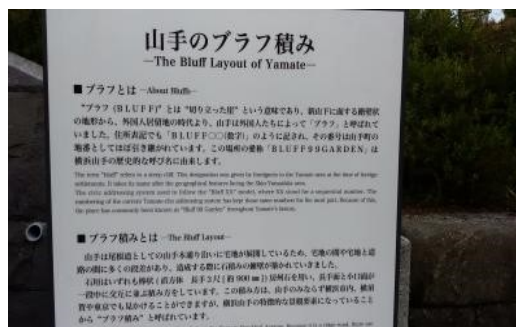


27. 横浜山手のブラフ積み

新年度が始まってから約3週間が過ぎた(2016.4.23)。ゴールデンウィークを迎えるこれからの季節は、郊外に出て散策するのも良いかもしれません。

横浜山手地区は、切り立った崖(ブラフ)の多い場所で知られている。山手地区は、尾根道としての山手大通り沿いに宅地が展開しているため、宅地の間や宅地との間に多くの段差があり、造成する際に石積みの擁壁が築かれたそうです。この石垣は、棒状で長手面と小口面を交互に並ぶ積み方をしており、特徴的な景観要素になっていることから「ブラフ積み」と呼ばれているのだそうです。

坂道を降りていくと、アメリカ山公園にハナミズキの紅白の花が咲いており、マリンタワーが見えた。すぐ下には、元町・中華街がある。



港の見える丘公園

神奈川近代文学館では、「100年目に会う夏目漱石」特別展 2016.04.23 が開催されていた。作品の背景など時間が経つのも忘れるくらい充実した内容であった。現在、「吾輩は猫である」が新聞に連載中ということもあってか、館内は老若男女の人で混み合っていた。近代文学館を出たところから、横浜ベイブリッジを眺めることができる。このあたりは、高台にある「港の見える丘公園」。

少し歩くと、外人墓地。遠くに見えるのはラウンドマークタワー。入り口には、大きなクスノキが見られる。



28. 麻布大学いのちの博物館

麻布大学いのちの博物館を見学する機会があった。

大学で研究を行うと標本をはじめとする学術的価値のある資料が生まれる。また教育のための教材もある。これら学術資料を博物館で長年保管することが大学の使命のひとつで、麻布大学にとって長年の夢だったそうです（麻布大学いのちの博物館ガイドより）。

いのちの博物館は、2015年9月にオープンしました。館内は①博物館のいざないコーナー、②獣医学コーナー、③動物に学ぶコーナー、④歴史コーナー、⑤ハンズオンコーナーで構成されており、コンパクトに展示されている。動物に学ぶコーナーでは、動物のいのちを学ぶために、動物の大きさとかたちをとりあげ、

アフリカゾウやキリン、ネズミなど、長い進化の間に生活の違いによって大きさの違いが生まれたことが理解できるよう展示されている。ゾウの脚の骨、シカの頭や脚の骨、タヌキやサルの頭の骨などが触れるハンズコーナは、一度試しておく価値はあると思った（ハンズコーナは土曜日限定）。入館料は無料。開館日時は火曜日から土曜日 10 時～16 時。アクセスは、JR 横浜線「矢部駅」北口から徒歩 5 分。



29.神奈川県立 A 高校のクスノキ

神奈川県立 A 農業高校を訪問。校舎わきに大きなクスノキがそびえていた。



30. 大山阿夫利神社へ

大山阿夫利神社より初詣。いつも厚木キャンパスから眺めている大山へ出かけた。新型のケーブルカーに乗車し、車窓から眺めた市内、遠くは相模湾まで一望。終点の大山阿夫利神社に初詣で。この1年、幸多かれと祈った。



31. 愛媛県立長浜高等学校 水族館

10年くらい前になるが、研修会の折、愛媛県立長浜高等学校の水族館を訪れた。水族館部の生徒たちが海洋生物の飼育管理を行っており、頼もしく思えた。

デバスズメダイが飼育展示されており、高校教員時代に石垣島でデバスズメダイ調査したこと、水槽内の群れ行動を観察記録したことを思い出した。



32. レトロな青梅駅周辺

JR 青梅駅構内は、なつかしい映画の看板。古い時代にまでタイムスリップの瞬間であった。

駅前には、昭和の雰囲気のあるお店。郷土博物館には御岳山の神木の年輪とオオカミの骨が展示されていた。



33. 甲子園出場の高校訪問

都立 0 高校を訪問。正門を入ると、2014 年に 21 世紀枠として高校野球甲子園に出場した記念の碑がありました。また、校舎には、都立 0 高校のシンボルでもある八角塔を見ることができた。

合唱コンクールを明日に控えて昼休みには、クラスごとにその練習に励んでいる様子を見ることができた。すべてに活気の満ち溢れた印象の都立 0 高校でした。



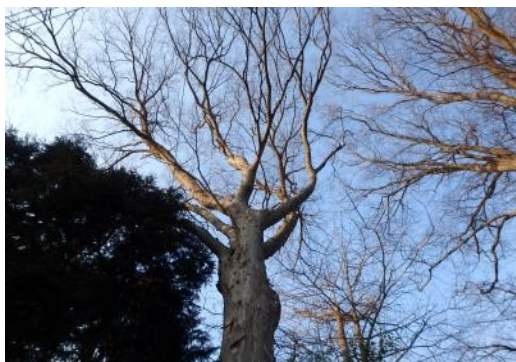
34-1. 農大厚木キャンパス周辺 3月の厚木キャンパス近くを歩く

キャンパスから東へ数百m歩くと、農道があり、ウメが満開。奥に春日神社が見える。



春日神社

境内には、保存指定樹木の古いケヤキがある。
神社名は、奈良春日神社の石灯籠と同じ形成に由来するらしい。



石灯籠

春日神社の石灯籠は、1417 年建立の厚木市重要文化財に指定されており、石灯籠は安山岩でできている。

そのほか、境内には歯の神様として徳川時代初期に祭祀されたものといひ伝えのあるご神体を見かけた。当時、歯の痛みが軽くなるように祈願する人が多かったといわれている。かつて、ここにはモミジが植えられていたという。

キャンパス近くを見つめることで、新たな発見や出会いがあった。





34-2. 天高く舞い上がれ 鯉のぼり

農大厚木キャンパス近くの恩曾川周辺は、鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいる。



厚木市 恩曾川の鯉と鯉のぼり

農大厚木キャンパス近くの恩曾川には、鯉が放流されている。現在、鯉のぼりも同時に見ることが出来る。



34-3 農大厚木キャンパスまでのウォーキング

本厚木駅から厚木キャンパスまでウォーキング。いくつかのルートがあるが、なるべく車道を避けて裏道を歩くルートを紹介。本厚木駅の北口（次ページ写真上左）から正面のMy load ビルの左（次ページ写真上右）を直進。正面に丹沢山が望める。約8分で246号線に突き当たるので、そこをさらに北上（次ページ写真中左）。突き当りの信号機を左折すると右後方に厚木キャンパスの建物が見えてくる（次ページ写真中右）。約20分で恩曾川の亀の子橋まで来ました（写真下左）。左後方に学生会館と本部棟が見える。湘北短大を右横に見ながら農大の入り口にたどり着いた（次ページ写真下右）。ここまで約25分。渋滞時のバス乗車よりも早く着く。途中、いろいろな発見があるので、お試しください。



34-4 農大厚木キャンパス 散歩道

農大厚木キャンパス周辺は自然に恵まれている。通学・通勤途中には、恩曾川（写真左）がある。相模川水系の支流で、厚木市内を流れる準用河川。厚木市上古沢を源流として南東方向に流れ、玉川に合流している。かつてイシガメが多く、今も生息している場所があり、「亀の子橋」という名前が残されている（写真右）。北に向かって歩き本厚木駅に戻る途中に木造山門の「興福寺」がある。山門を入ると境内は広く本堂などが植栽の中に建っている（次ページ写真）。



34-5 農大5門

農大厚木キャンパス編。本厚木駅南口14番のりば厚109系統「東京農業大学」行バスに乗車し約15分で正門前に着く（写真左）。正門から構内を反時計回りに歩いてみる。

まず長谷門（写真右）です。門というよりは、ゲートのようになっている。下宿している学生たちには良く利用されているようです。長谷門を上がっていくと昨年秋に完成した学生会館（写真下）が現れる。近くには「もったいないガーデン」とネーミングされた素敵な憩いの場所がある。





農大5門 Part2

写真左は、船子門です。正門の反対側にあり、裏道としてのプロムナードになっている。四季折々の移り変わりが楽しめ、坂道を登っていくと、右手に植物園温室がある。

写真右は、温水門。ここもゲートのようにになっており、利用する人は余りいない。ゲートを入った左側には、バイオセラピーセンターがあり、馬を見ることができる。

正門に次いで利用者が多いのが駐輪場下の通路。ゲートはありませんが、徒歩または自転車通学の学生には行き帰り利用されており、門といっても良いでしょう

農大厚木キャンパスには5つの門（ゲート含む）がある。



35-1 農大厚木キャンパス構内 桜満開十七景

農大厚木キャンパスの桜が満開。アングルを変えて撮影。春は新たな出会いの季節でもある。



駐輪場坂道



植物園周辺、駐輪場入り口



学生会館周辺





桜のトンネル



講義棟周辺



35-2 夏も近づく・・・

八十八夜が過ぎ、夏も近づいてきた。新年度に入り、期待や不安を感じながらも新たな環境で頑張りすぎてしまった人は多いのではないのでしょうか。5月という季節は、新年度が始まり2ヶ月経過し、緊張を強いられていた気持ちが連休明けで一気に緩み、それがストレスとなって心身に変調をきたすといわれてきた。現在では、入学・入社後の2年目の人がとくに注意を要するといわれるようになってきた。これまでの期待感や意欲がそがれ、心身の不調や無気力な状態になってしまうことが多いからだそうです。

農大厚木キャンパス入り口付近からは茶畑とニセアカシアの花が緑と白のコントラストで鮮やかに映えています。構内に入れば、若葉のケヤキ並木が続いている。心やすまる光景ですね(2015.05.12).



35-3 農大厚木キャンパス構内 アジサイ百景

梅雨の晴れ間にアジサイが良く似合う。
アジサイが見ごろの季節となった。キャンパス内のアジサイが私たちの目を楽しませてくれる。



アジサイの世界

駐輪場前の坂道はアジサイワールド。



アジサイ 梅雨の晴れ間に 思わず見とれてしまう。





アジサイのひとつとき 心に留めて見るひとつとき。





アジサイ 彩りさまざま



小さな植物展

第2講義棟前では、小さな植物展「アジサイの世界」が目を楽しませてくれた。



35-4 厚木キャンパスのケヤキ並木

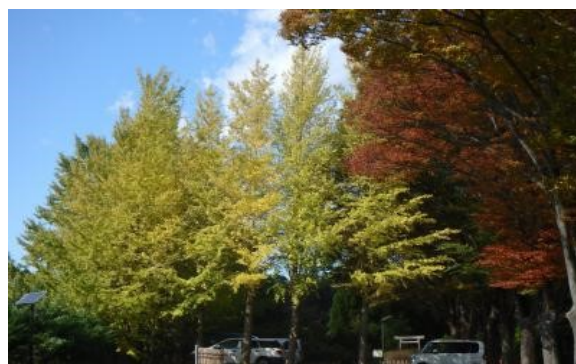


35-5 厚木キャンパスの黄葉

晩秋の厚木キャンパス。イチョウの黄葉が美しい。樹木たちも冬に備えて準備。



秋色点景 秋も深まってきた。イチョウ、ケヤキの点景。



夏が終わり秋が来る

緑陰の秋の1日。農大厚木キャンパスより。



秋惜しむ

季節は移ろいやすい。厚木キャンパスのイチョウも秋から冬へ模様替え。ケヤキ並木も冬バージョンです。



35-6 晩秋から師走へ

季節は少しずつ動いている。厚木キャンパスのケヤキ並木の葉やイチョウの黄葉も晩秋から冬の季節へと急ピッチで変化している（写真左）。イチョウの左側に見えている丹沢山が白く覆われてくるのも間もないでしょう（写真右）。



35-7 厚木キャンパスから富士山が見える場所

冬は富士山が良く見える季節。厚木キャンパスから富士山が見える場所を紹介する。構内の「豊受大神宮」(次ページ写真左) 西側から大山方面を眺めると、左側に冠雪した富士山の一部を見ることが出来る(写真右)。良く見ないと見過ごしてしまう。時間帯は午前中、澄み切った青空の日に見るのがベスト(2016. 01. 05)。



35-8 丹沢・大山が くっきり

このところの冷え込みと連休後のこともあってか、今朝の丹沢・大山はきれいに見えた。

写真は、通勤途中 2017. 01. 10 に撮影。厚木市恩名付近より丹沢・大山を望む。

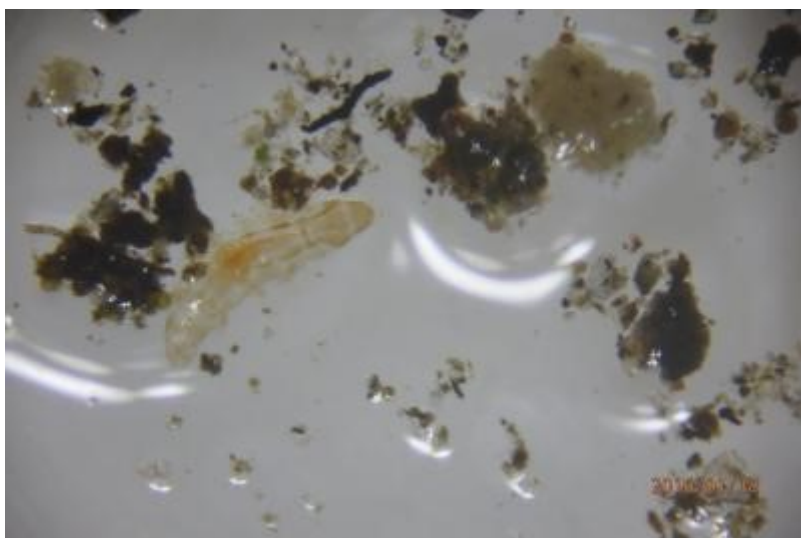
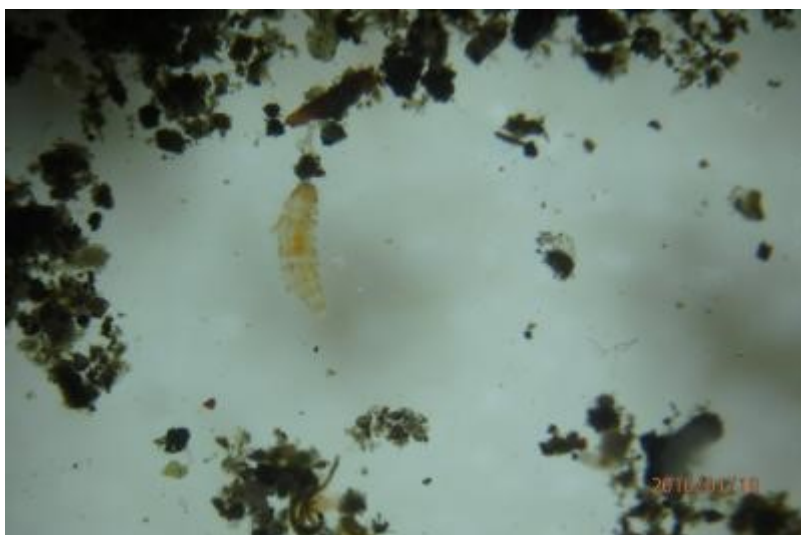


2016.01.20

35-9 厚木キャンパスでクマムシ発見！

1年あまり温めてきたクマムシを厚木キャンパス内で見つけることが出来た。講義棟及び本部棟の屋上角のコケを採取し、水に浸してから24時間置いた。観察は理科教材研究授業に合わせ、実体顕微鏡を用いて行いました。写真はデジタルカメラ（オリンパス Tough）及び学生のスマートフォンで接写、一部動画撮影が入っている。クマムシは、緩歩動物門に属し、歩き方がゆっくりしているところから英語では Water bear(水の熊)と呼ばれている。体長が0.1~0.5mmなので肉眼では見つけにくい。顕微鏡で見ると、体系は紡錘形で、腹側に8本の足がある。足の先には爪があり、その足でゆっくり歩いているのが観察できました。学生とともに、感動を味わった。

身近なものから科学へ。





36-1 農大世田谷キャンパス 経堂 散歩道

小田急線経堂駅から徒歩で2, 3分。経堂農大通りから約50m 入ったところに「経堂山福昌寺」がある。この寺の開基となった医師でもあった松原土佐守弥右衛門が、屋敷内に多くの医学書を蔵していた。土地の人は、その書物を経本としてみなして、この屋敷を「経堂」と呼んだために、この付近の地名も同じく経堂と呼ばれるようになったという。経堂の由来は、ほかにも諸説あるようで、この福昌寺がその1つになっていることに、なぜか親しみを覚え境内を散歩した。



36-2 経堂農大通りで小さな発見

経堂農大通りの信号近くで、Heart Family の石像を見かけた（写真左）。よく見ると、農大ファミリーの石像。兄（農大商一）今はサラリーマン、いずれパパの後を継ぐつもりでいるらしい。兄嫁（農大栄子）兄の年上女房。頭が良く快活で商店向きの人だと母はよく言う。甥（農大健介）兄に似ず、頭がよさそうで末が楽しみな我が家の初孫。レリーフに刻み込まれていた説明文から。これまで気がつかずに通り過ぎていた。

和光小学校前の民家に「私の名前は黒法師と申します。よろしく」の寄せ書きと鉢植えがあるのを見かけ、思わず足を止めてみた（写真右）。心遣いが素敵だなと思った。黒法師を調べてみると、モロッコ原産の園芸品種で、ロゼッタ状に葉を茂らせ、徐々に下の方のものが枯れて茎が出てくる。夏には、葉がつやつやと黒紫色に色づく。黒法師が多肉植物であることも発見。時には立ち止まってみるのが大事ですね。



36-3 世田谷キャンパスにもケヤキ並木があります

農大にケヤキ並木があることは、意外と知られていない。世田谷キャンパス「食と農」の博物館横のケヤキ広場から 15 号館方面を撮影したケヤキ並木。



36-4 農大5門 Part1

世田谷キャンパス編。最寄り駅の経堂駅から最も近く、学生・教職員に利用されているのが経堂門（写真左）。正面にアカデミアセンターが見えます。経堂門から道路沿いに時計回りに歩いてみる。世田谷通りに面しているのが正門（写真右）。



農大5門 part2

世田谷通りから千歳通りに入ると、最初に用賀門がある（写真左）。右側の建物が12号館、左側には百周年記念講堂が見える。その先には桜丘門（写真右）がある。この門はあまり利用されていないようです。さらに歩いていくと、千歳門（写真下）がある。右側に常盤松会館、左側には野球場がある。千歳船橋駅を利用する学生・教職員には利用されているようです。世田谷キャンパスの5門を巡るウォーキングには、発見がある。春先の千歳通りは、桜並木としても鑑賞が楽しめる。一度、試してみてください。





36-5 この道は農大世田谷キャンパスへと続く1本道

世田谷キャンパスまでは、最寄り駅の小田急線経堂駅南口から徒歩約15分の道のりにある。

写真は、農大通り商店街、交差点の信号を過ぎ、住宅街そして和光小学校の前から東京農大の看板および農大アカデミアセンターを望んだスナップ。ここまで歩いて、不思議なことに気づいた。

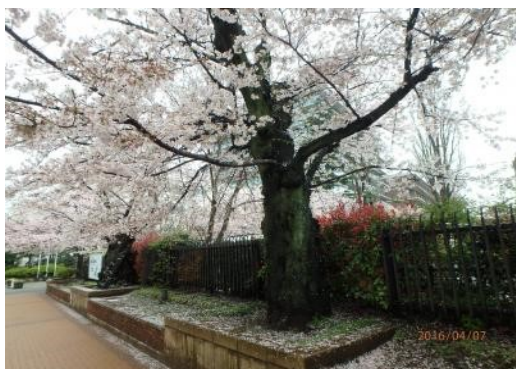
経堂駅から農大までの1本道は、なぜか歩行者が左側通行になっていることに気づかされる。関東のエスカレーターが左側通行になっているのと同じ原理。いつごろからこのような流れになってきたのか定かではない。人の流れを見てみると面白いと思った。



36-6 春惜しむ

春は、物事のはじまりの季節であり、新たな人との出会いでもある。満開の桜も、このところの雨で、少しずつ移ろいでいます。

写真左右の桜は、世田谷キャンパス経堂門および用賀門付近。



36-7 世田谷キャンパスから高層ビル群

新宿駅周辺（東京タワーのある港区や東京スカイツリー周辺含む）になぜ多くの高層ビルが集中しているのか考えたことはありますか？

新宿駅周辺は高位の大地にあり地盤としては良好な場所だからそうです。断面図で見ると、これを裏付けるような地盤・地質になっています。地層の層相変化がなく、ほぼ水平に堆積した地盤は、大地を作っている古い地層「下末吉層」（最終氷期の頃に海底でできた地層）がゆっくり時間をかけて堆積した土地条件になっています。中でもローム層（厚層 6～10m）が西新宿に向けて厚くなり、ローム層下には粘土、砂、レキ層と続いています。これが地盤としては申し分ないということだそうです。

一般に、超高層ビルでは、台風や大地震時の傾きが 1/250 ぐらい（高さ 100m なら横に 40cm）に納まるように設計することが多いそうですが、大部分は柱の伸び縮みと梁の曲がりによるもので、基礎の変形は 1～2mm ぐらい（建物頂部で横に 1cm 以下）だそうです。また、建物が倒れるのは、傾きが 1/50 を大きく超えた状態になってからだそうです。学生時代に、高層ビル建設に伴うボーリングは、地下 100m 位まで行うことを聞いたことがあり、なるほどと合点がいった。

このように超高層ビル建設の立地条件には、地盤構造と耐震の建築設計が施されている。写真は、世田谷キャンパスから撮影した新宿高層ビル群（次ページ

左)、東京スカイツリー (次ページ右)、東京タワー (次ページ下)。

いずれも iPad のズームカメラで撮影 2016.02.18

。



36-8 農大世田谷キャンパス周辺 農大通り・寄り道・散歩道

小田急線経堂駅から農大通り商店街を通り抜け、交差点を左折したところに経堂大橋公園がある (次ページ写真左)。そこに「烏山川緑道」の案内板があるのを見つけた (次ページ写真右)。昔の烏山川の水源は、現在の高源院 (北烏山 4 丁目) の池に武蔵野の伏流水が湧き出した自然発生の川だそうです。昭和 40

年代に排水路化された川に下水道幹線を埋めて排水を流し始めたと、案内板に記されていた。通学・通勤路から少し外れてみると、このような日常の発見がある。地域の河川の変遷や歴史のことが理解できた。

世田谷区の緑道は、昭和44年以降、中小河川の上部を有効利用し「緑道」の造成に力を入れてきた。「緑道」は、自然を取り戻し、歩行者の安全と緊急避難通路の確保などを目的として作られたそうです（次ページ写真下）。



世田谷区の緑道

世田谷区では、昭和44年以降暗渠化されていく中小河川の上部を有効利用する方法として緑道の造成に力を入れてきました。緑道は、自然を取り戻し、歩行者の安全と緊急避難通路の確保などを目的として作られ烏山川緑道はじめ8本の緑道が昭和54年度に完成しました。その後、野川緑道、谷川緑道、などが造成され、この目黒川緑道を含め16本、面積約15haの緑道が完成しました。(2009年3月現在)

農大通り・寄り道・散歩道 その2

昭和20年以前は農業用水として利用（写真左）。昭和30年代に入ると都市化による水環境が悪化（写真右）、昭和40年代に下水道幹線が整備されるようになった（次ページ写真下）。案内板には、このような記録を見ることができる。



36-9 農大世田谷キャンパスから富士山を望む

今朝 2017. 01. 11、富士山がきれいに見えた。遠くから眺める富士山も格別。
写真は、世田谷キャンパス・アカデミアセンターから撮影。



2018.07.23

37 東京大学 さまざまな環境に適応する動物たち

日本動物学会関東支部公開講演会に参加する機会があった。講演題目と演者は、「トンボの体色形成メカニズムと環境適応」産業技術総合研究所主任研究員 二橋亮氏、「海から川や湖へ！トゲウオから探る進化の秘密」国立遺伝学研究所助教 石川麻乃氏、「最強動物!? クマムシのサバイバル戦略を読み解く」東京大学大学院理学研究科准教授 國枝武和氏であった。研究内容は、フィールドワークに加えて、最新の分子機構の新知見が加えられたものであり、充実したものであった。会場には、夏休み中の事もあってか、親子連れや高校生、大学生も多かった。



2018.07.23

38-1 東京大学総合研究博物館 珠玉の昆虫標本

江戸時代から平成の昆虫研究を支えた東京大学秘蔵コレクションを見学する機会があった。
東京大学総合研究博物館が 2018 年の特別展示として公開されたものであった。





38-2 珠玉の昆虫標本

館内には、左右非対称のニワトリの標本や北海道和種馬、巨大なホルスタイン種の乳牛の標本なども展示されており、見ごたえのあるものであった。





2018.03.31

39 科学博物館 人体展

上野の科学博物館。「人体展」を見学。音や色で表現した「ネットワークシンフォニー」というエリアがあった。そのほか、「ゲノム解析による縄文人の顔相復元」など、新たな知見が得られた。





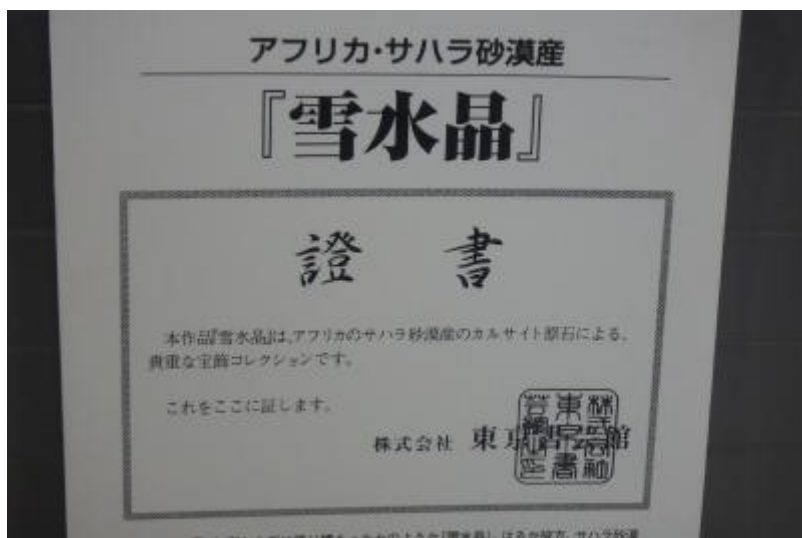
2018.01.28

40 横浜サイエンスフロンティア高校附属中学校訪問

28日(日)神奈川県生物教育研究会が横浜サイエンスフロンティア高校・附属中学校において行われた。この中高校は、文科省認定SSH(スーパーサイエンスハイスクール)と科学技術人材育成重点校SGH(スーパーグローバルハイスクール)に指定された比較的新しい学校です。創立当初から各種コンクール、学会への発表および多くの受賞で知られている。



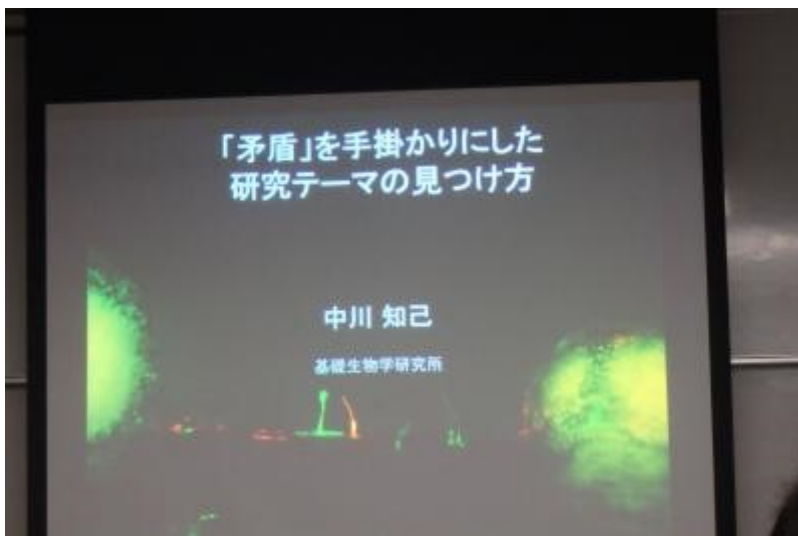
構内ホールには、5人の国内の科学者の写真とメッセージの入ったパネルが掲示されていた。また、サハラ砂漠産の雪水晶の標本が展示されているなど、サイエンスを学ぶ若い中高生への刺激的な空間に満ちていた。

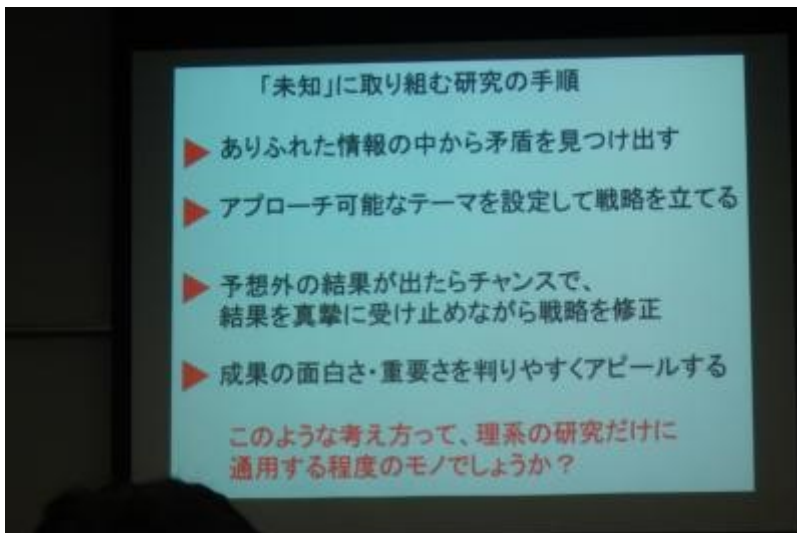




矛盾を手掛かりにした研究テーマの見つけ方

基調講演は、基礎生物学研究所の中川知己博士による「矛盾を手掛かりにした研究テーマの見つけ方」があり、未知に取り組む研究の手順について示唆に富むものであった。

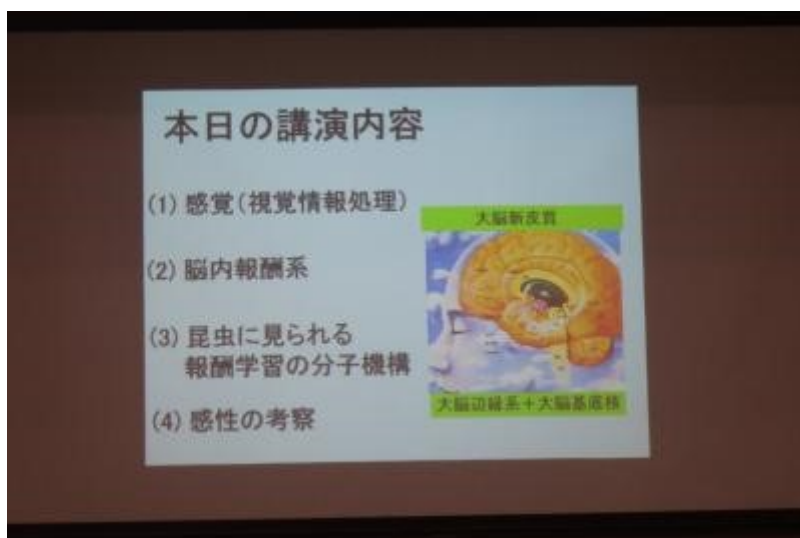




2017.11.19

41 東京学芸大学 不思議と感じる感性を高める教育

理科教育シンポジウムを拝聴する機会があった。基調講演は、東京学芸大学の吉野正巳教授による「感性は訓練によって育まれるか？」であった。人間の喜怒哀楽の感情、直観力、意思決定や記憶・学習など、心の働きはすべて脳が担っている。近年の脳科学は、こうした心の働きを、神経回路や物質レベルで解明することを可能にしている。講演内容は、昆虫が報酬を与える学習訓練により、長期記憶を形成する分子機構の研究が紹介され、脳の視点から感性について考察した興味深いものであった。



2017.07.02

42 藻類の多様性

生物の認識のしかたは、時代とともに変化する。

昨日、神奈川県生物教育研究会において「生物の大系統と細胞内共生が駆動する藻類の多様性」（筑波大学・石田健一郎教授）の講演があった。

近年の分子系統解析の発達により、真核生物には 8 つ程度の主要な系統群が存在することが明らかになってきた。講演では、系統関係に基づいた生物の大きな分類についての現状と、細胞内共生による葉緑体の進化と藻類の多様化などについて、地球史などとの関連も含

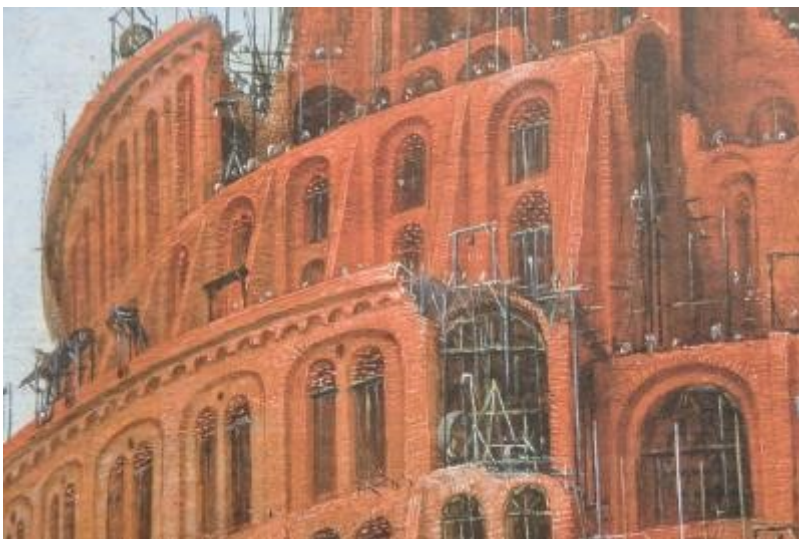
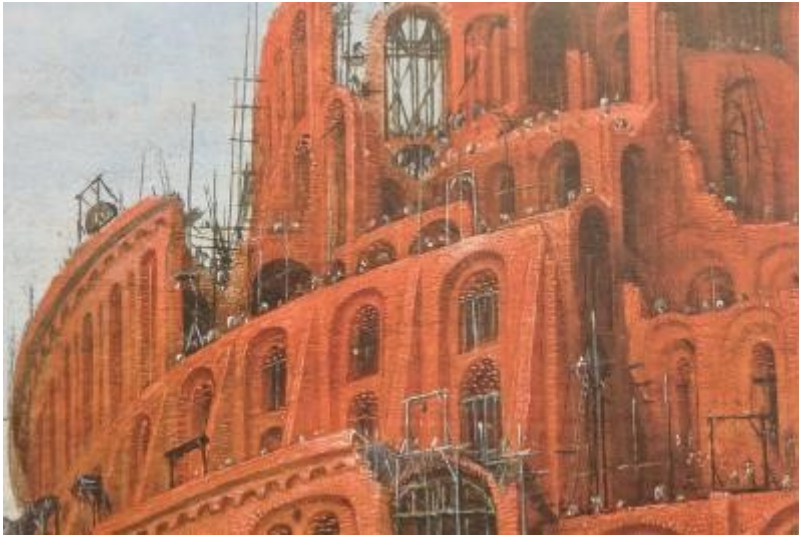
めた内容の紹介がされた。



2017.05.25

43 壮大・細密 マクロとミクロの視点

500年前に活躍したブリューゲル「バベルの塔」展を東京都美術館で鑑賞した。作品は、見事というしかないほど圧倒された。塔の中には約1400人もの人がゴマ粒ほどの大きさに描かれている。どこまで小さく細かく描かれるか限界に挑戦しているように思えた。足元だけではなく、遠景にも目を凝らすと1つ1つが丁寧に描かれているのが理解できる。



正確に再現

建設中の塔に目を凝らすと、工事の様子が詳しく描かれている。重機の描写は正確。塔の上部にはれんがでアーチを造る様子も。建築現場で働く人々を実によく観察している。





細密

塔の下から4層目、中央部分には、赤い天蓋やのぼりのようなものを携えた人々が行列をなしているのが見える。

遠景には当時の港町と大きな帆船などが克明に描かれている。





44 東京学芸大学—日本生物教育学会—

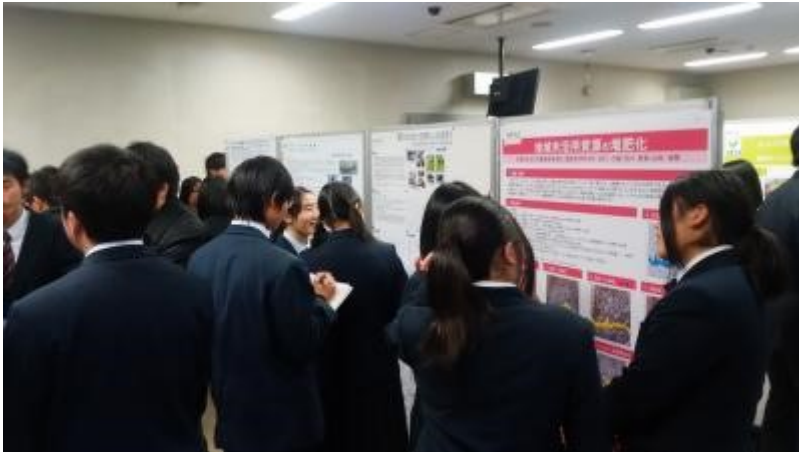
第 101 回日本生物教育学会が東京学芸大学で行われた。農大からは、学部生 2 名と教員 1 名が参加・発表を行った。

口頭発表の他、ポスター発表(高校生発表含む)やワークショップがあり、シンポジウム、特別講演があった。

シンポジウムでは、生物教育における深い学びとは?～小中高をつないで「探究」のあり方を考える～について、5 名のシンポジストによる話題提供があり、参加者とともに認識を深めた。

シンポジウムは、次期学習指導要領のキーワードになる「深い学び」「探究」に焦点を置いたものであった。





絶滅した生物「首長竜」

特別講演「絶滅した生物 首長竜」を聴講する機会があった。講師は東京学芸大学佐藤たまき准教授。第36回猿橋賞受賞者である。

講演概要は以下の通りであった。

恐竜などの化石生物を扱う研究分野は古生物学と呼ばれ、生物学と地学の境界にある学問である。地層から出てくる化石を扱うという点では地学の視点が欠かせず、進化を扱うという点では明らかに生物学の一部である。そのため、古生物学の関わる内容は学校の理科教科書では生物学にも地学にも登場する。首長竜は恐竜ではなく、分類学的には、どちらかと言えばトカゲやヘビに近いグループに属する。古生物学と生物教育との関わりについても考察が加えられ、有意義な内容を含むものであった。

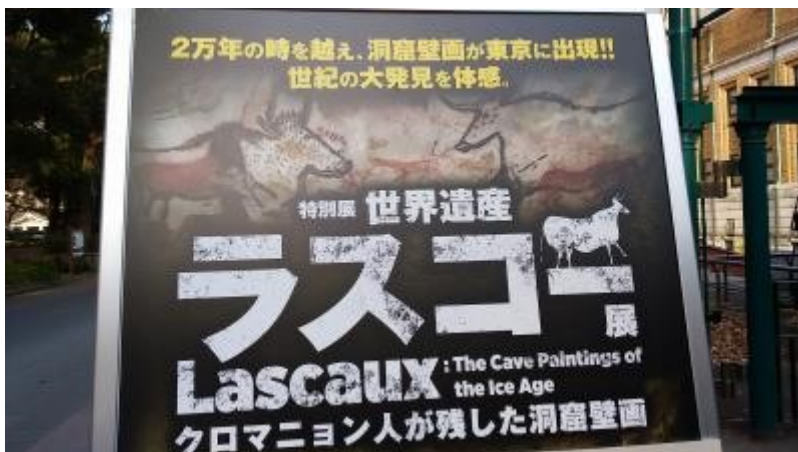


2017.01.01

45 世界遺産 ラスコー展～クロマニヨン人が残した洞窟壁画～

師走に、ラスコー展を見る機会があった。

今から 2 万年ほど前、フランス南西部のヴェゼール溪谷にある洞窟に、躍動感溢れる動物たちの彩色画が描かれました。そこはラスコー洞窟。壁画を描いたのはクロマニヨン人です。ラスコー洞窟の壁画は、彼らが描いた数ある壁画の中でも色彩の豊かさや、技法、そして 600 頭とも言われる描かれた動物の数と大きさなどが格別に素晴らしく、1979 年に世界遺産に登録されました。壁画を保存するため、洞窟は現在非公開となっている。





クロマニヨン人によって描かれた洞窟画

地下に長く伸びる洞窟は枝分かれし、壁画が集中している大空間などがいくつかある。洞窟の側面と天井面（つまり洞窟の上半部一帯）には、数百の馬・山羊・羊・野牛・鹿・かもしか・人間・幾何学模様の彩画、刻線画、顔料を吹き付けて刻印した人間の手形が500点もあった。これらは15,000年前の後期旧石器時代のクロマニヨン人によって描かれていたといわれている。



洞窟壁画の材料

洞窟壁画の材料としては、赤土・木炭を獣脂・血・樹液で溶かして混ぜ、黒・赤・黄・茶・褐色の顔料を作っていた。顔料はくぼんだ石等に貯蔵して、こけ、動物の毛、木の枝をブラシがわりに、または指を使いながら壁画を塗って描いたと考えられる。

当時のクロマニヨン人が洞窟壁面に、どんな思いを寄せ、何を考えながら描いたのか、想像力を逞しくしたひと時であった。



46 シーボルト展

2016年はシーボルト(1796-1866)の没後150年に当たる。過日、上野の科学博物館において、シーボルト及びその関係者が実際に収集した自然史の標本、シーボルト標本によ

って学名が与えられた生物等の展示、日本の自然を世界に紹介したシーボルトの貢献について見る機会があった。シーボルトは、1823年にオランダ商館の医師として来日。鎖国のため外国からは未知の国に等しい日本の自然を世界に広く紹介すべく、ぼう大な資料を収集し、自らも研究。シーボルトの生涯とその時代背景などを学ぶことができた。シーボルトは単にコレクターとしてだけでなく、研究者として日本植物の分類にも貢献していること、研究を通してシラネアオイやキブシなどの固有種の存在を明らかにしたことなどもわかった。

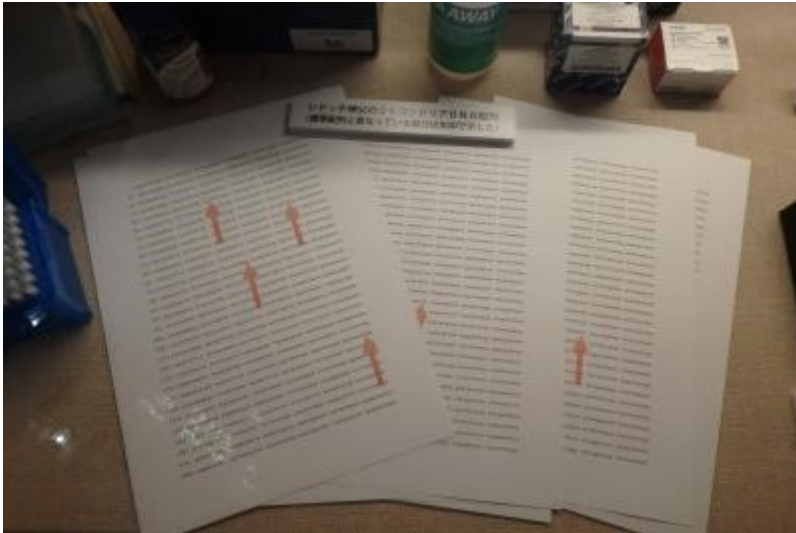




江戸時代の人骨からの年代判定

シーボルト展の出口に興味ひかれる展示があった。2014年に文京区の小日向一丁目にある「切支丹屋敷」から3体の人骨が発見され、次世代シーケンサーによる解析の結果、人骨の復元から3人の性別と身長などの特徴が判定されたという展示であった。ミトコンドリアDNA配列から、そのうちの一体が江戸時代のシドッチ神父であると確定できたそうです。現代の科学が、どのようにして神父を現代によもがえらせたのか、その過程を学ぶことができ、新たな発見があった。





2016.11.21

47 科学博物館 生命を育む土壌の世界

土壌の表層は、あらゆる生物が生息する基盤となっている。
微小な菌糸が、落ち葉をどのように食べて、土を作っているのか、最新の知見が得られ、インパクトのある内容であった。

第8回 シンポジウム プログラム
公益財団法人 藤原ナチュラルヒストリー振興財団

テーマ：「土と生き物の自然史」

日 時：2016年11月20日（日）13:00-16:00（12:00 受付開始）

場 所：国立科学博物館 日本館2階講堂

（職員通用口からお入りください）

www.kuhaku.go.jp/

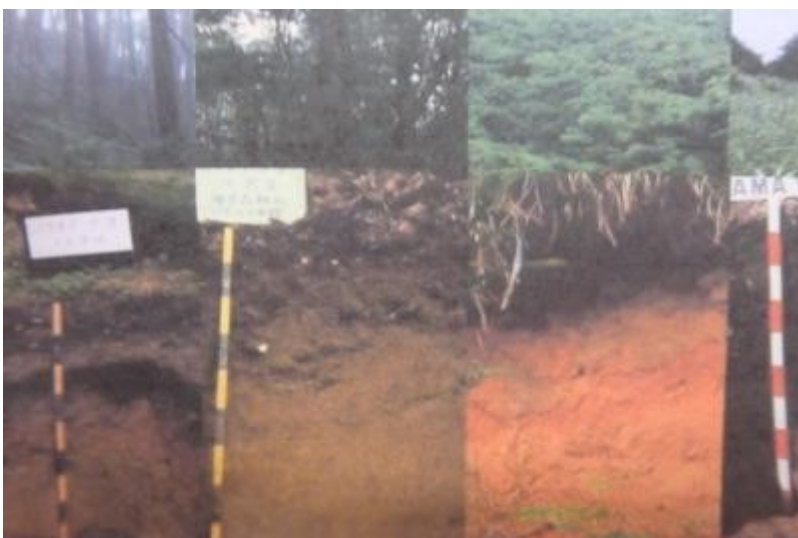
東京都台東区上野公園 7-20

主 催：公益財団法人 藤原ナチュラルヒストリー振興財団
独立行政法人 国立科学博物館

定 員：120名

参加費：無料

申込方法：Fujiwarand@yahoo.co.jp に、氏名、フリガナおよびメールアドレスを書いてお申し



土と生き物の自然史

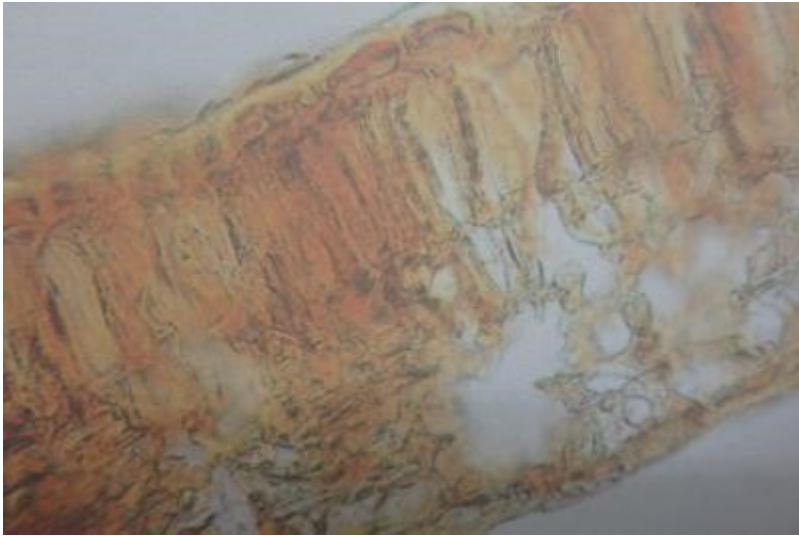
土と生き物をテーマにしたシンポジウムに参加する機会があった。上野にある国立科学博物館日本館の会場には、高校生を含む約 100 名の参加者が聴講に訪れていた。

プログラムは、以下の 4 題であった。

1. 「生命を育む土壌の世界」野田憲司氏（筑波大学）
2. 「菌類は落ち葉をどのように食べ土を作っているのか？」大園享司氏（同志社大学）
3. 「気持ち悪い？でも面白いミミズの世界」伊藤雅道氏（駿河台大学）
4. 「土壌甲虫アリヅカムシ（コウチュウ目ハネカクシ科）の多様性とインベントリー」野村周平氏（国立科学博物館）

どの演題も、これまでの考えや常識を変えてしまうくらい、面白く充実した内容であった。





2016.07.21

48 わたしたちは星から

村山齊氏（東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙機構長）による「宇宙は何でできているのか」を聴講する機会があった。

万物は原子でできているといわれている。20 世紀の天文学・物理学の偉大な発見は、星も原子でできているということであった。

生き、別れの生みの母である暗黒物質と暗黒エネルギーが、本講演のテーマであった。宇宙の物質の 8 割の正体は、まだわかっていないそうだ。

現在、暗黒物質と暗黒エネルギーの正体を探る宇宙のゲノム計画ともいうべきものに例えて、それらの謎の解明に取り組んでいるようだ。村山氏によれば、宇宙は加速しているそうだ。現代物理学の謎の 1 つとされる、何か宇宙を押ししていることを解明していくことが、

宇宙（地球）の将来を考えると時の重要なキーワードとなることを学んだ。

教科教育法の授業においても、宇宙の始まりと将来について言及することがあった。今回の講演から考えさせられることは多く、次年度以降の授業に取り入れていきたいと思った。

宇宙は何でできているのか

日時：平成 28 年 7 月 21 日（木）16:20～17:20
会場：農大アカデミアセンター B1F 横井講堂

【講演概要】

宇宙をわかるためには、宇宙を形作っている中身が分からないといけません。特に宇宙の始まりに遡ろうとすると、宇宙自身がどんどん小さくなるため、小さいもの、つまり素粒子が大事な役割をします。

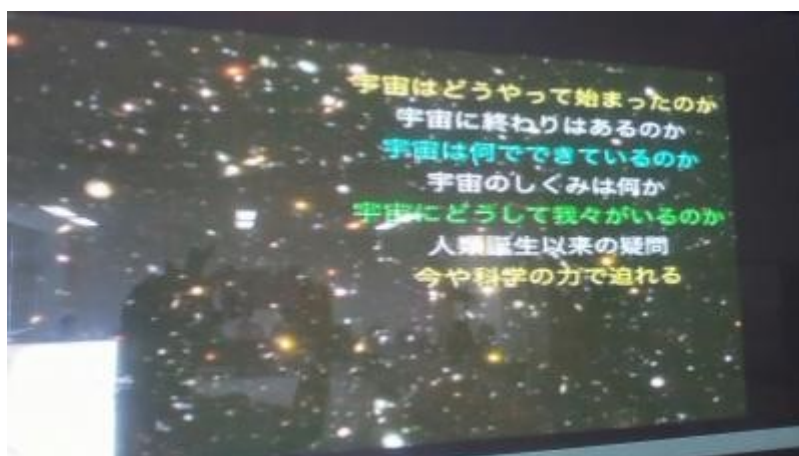
こうして「宇宙は何でできているのか」は「宇宙がどうやって始まったのか」そして「宇宙の運命は何か」という問題につながってきます。特に宇宙の 95% を占める暗黒物質・暗黒エネルギーの正体が重要です。

こうした宇宙と素粒子の関わりについて、簡単に解説します。

【講師】 **村山 斉 氏**

米カリフォルニア大学バークレー校 物理教授
MacAdams 副教授
東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構
機構長 特任教授

【講演科目】
素粒子物理学 宇宙物理学 天文学 物理学





2016.07.09

49 六本木ヒルズに出現した古代空間

ポンペイの壁画展を鑑賞。日本初公開となる高さ 2m 超、重さ 500kg の巨大壁画などが、海拔 250m の森アートセンターギャラリーで公開された。

「秘儀荘」を筆頭とする壁画の美しさは、ポンペイの赤と呼ばれ、火山灰で閉じ込められてできた色ともいわれている。現地で見ることができなかった壁画に感動。充実したひとときを過ごした。





世界遺産 ポンペイの壁画展

ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロよりも、はるか古代の西洋絵画の源流を読み取ることができた。遠近法はすごいなと思った。



古代ローマ人の美意識を過体験できるよう、室内を一部再現展示します。古代ローマ美術史研究の第一人者、青柳正規・東京大学名誉教授監修によるポンペイ壁面のまさに「決定版」ともいえる本展を、ぜひご覧ください。



日本初公開！ 聖域に遺された奇跡の壁画



2016.07.09

2000 年前へのタイムスリップ

遺跡から発見された公共建築や住宅の壁画の数々は、古代ローマ人がいかに美術を愛し、建物を壁画で飾ることに熱心であったかを語りかけてくる。





2016.06.26

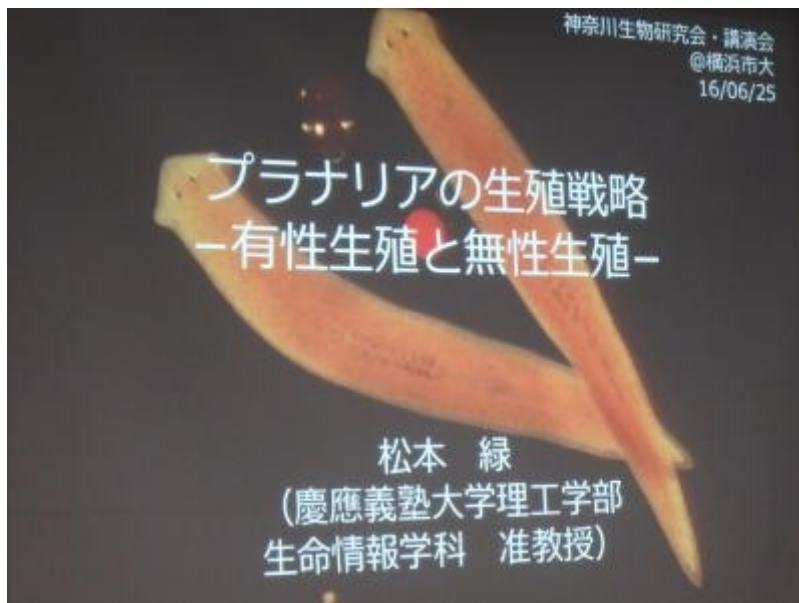
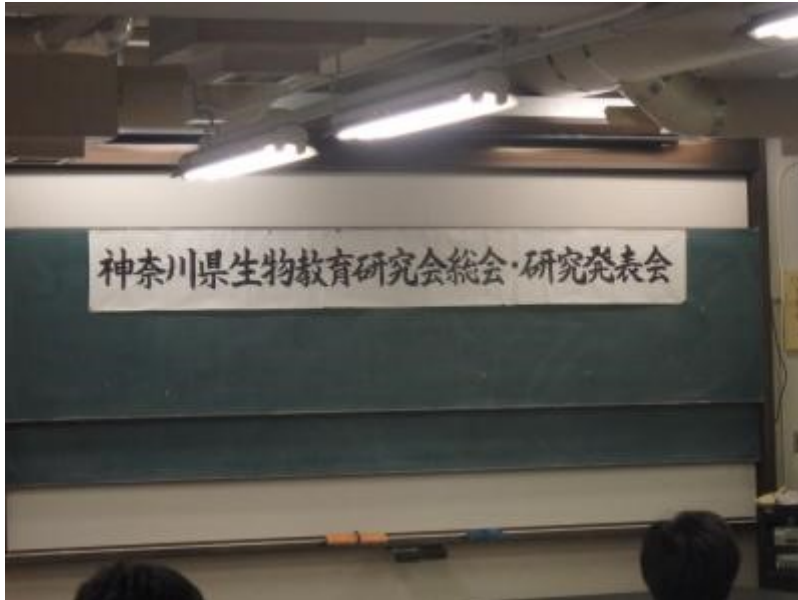
50 横浜市立大学 プラナリアの生殖戦略

6月25日、神奈川県生物教育研究会（会場：横浜市立大学）において講演会があった。講師と演題は、慶應義塾大学理工学部の松本緑准教授による「プラナリアの生殖戦略—有性生殖と無性生殖であった。講演の主な内容は、「有性生殖を獲得した真核生物にも、状況により無性生殖を行う生物が存在する。自然界のプラナリアには、自切と再生を繰り返す無性生殖系統、雌雄同体の生殖器官を形成し2匹が交接する有性生殖系統、さらに季節など環境因子により両生殖様式を転換する系統が同種に共存する。転換系統では、生殖コストをかけずに繁殖できる無性生殖の長所と遺伝的多様性を生じることができる有性生殖の長所を活用していると考えられる」であった。

松本准教授は、無性生殖個体に有性生殖個体を餌として与えることにより、有性生殖状態

に転換させる人為的な生殖様式転換系を開発し、この生殖様式転換メカニズムの解明を目指している。また、実験で用いるプラナリアは3倍体でありながら生物学の常識であるに反して有性生殖を行っていることを明らかにしている。

新知見を聞くことができ、有益な講演であった。





2016.06.19

51 上野 ブータンの生活様式

自給自足率の高い生活を誇るブータン。地域ごとに独自の文化が息づいている。写真は、女性用衣装「キラ」。キラは、木綿、絹、野蚕などを素材としており、最も上質なのは絹で織られたものだそうです。キラの文様部分は、野蚕（エリ蚕）が使用されている。ブータンでは、宗教的に殺生を嫌うため、サナギが羽化した後の繭を紡いで紬糸をとるのだそうです。19世紀までのブータン人は、多くがイラクサの布を着ていたそうです。イラクサは、照葉樹林の樹下に生育している植物で、この草の皮から繊維をとり、糸をつくり、布を織ったとのこと。持続可能な生活を感じた。





2016.06.12

52 上野公園 この木なんの木 気になる木

都内の公園を訪ねた。ある木の前に立ち止まってみた。パネルには、「樹皮が緑色で、葉が桐に似ている。実は成熟前に開き、その縁に数個の種子をつける。動物との関わりとしては、ヒヨドリなどがこの木の実を食べる」の説明文があった。

この樹木の名は？ 答えは、このパネルをめくってください。
パネルをめくると、おおぎりと刻み込まれていました。

近くには、アメリカデイゴの木があり、赤い花を咲かせていました。アメリカデイゴは、南アフリカ原産の落葉樹で、鹿児島県の県木に指定されているようで、沖縄の県花デイゴとは別の種類だそうです。

公園内を巡ると、教材の対象になるものが多く見つかります。授業でも活用したいものです。

この樹木の名は？

答は、このパネルを
めくってください。



【ヒント】 花 葉 実



- 特 徴**・樹皮が緑色で、葉が桐に似ている。実は成熟前に開き、その縁に数個の種子をつける。
- 用 途**・樹皮の繊維は水に強く。縄の材としてつかわれる。木質はやわらかく割れやすいが、家具類、箱、げたなどに利用する。種子は炒って食べたり、コーヒーの代用とされた。
- 動物との関わり**・実はヒヨドリ、その他の鳥が食べる。

あおぎり

あおぎり科 落葉・互生

花 黄色 6~7月

梧桐 実 黄褐色 9~10月

【ヒント】 花 葉 実



- 特 徴**・樹皮が緑色で、葉が桐に似ている。実は成熟前に開き、その縁に数個の種子をつける。
- 用 途**・樹皮の繊維は水に強く。縄の材としてつかわれる。木質はやわらかく割れやすいが、家具類、箱、げたなどに利用する。種子は炒って食べたり、コーヒーの代用とされた。
- 動物との関わり**・実はヒヨドリ、その他の鳥が食べる。



2016.06.01

53 都立F高校シンデレラ階段

都立F高校を訪問した。生徒昇降口に昇る大きな階段は、「シンデレラ階段」とネーミングされている。素敵だなと思いました。都立F高校は、平成25年度より男子は黒の詰襟に黒のズボン、女子はセーラー服が、登校時の基本スタイルになったそうです。また、都教育委員会より剣道部、なぎなた部、陸上競技部の3部が「スポーツ特別強化校」として指定されたそうです。それまでに関東大会、全国大会への出場を果たしており、多くのトロフィーや表彰状が見られた。

また、都立F高校は、「理数アカデミー」校としても都教育委員会より指定されており、文字通り文武両道を目指す中学・高校の一貫校の一つです。



訪れた都立高校は、最上階に天文台があった。案内してくれた実習生は高校時代に天文部に所属し、農大でも天文部で活動しているとのこと。天文台のある高校は珍しい。

廊下には、理数アカデミーの成果の一部がパネル展示されていた。また、放課後の自学自習スペースとして個人ブースの机が並べられてあるのが目についた。教育に力が注がれていることが理解できた。





実験と探究未来学

教育実習生は、「カタラーゼの働きと性質」を調べる実験指導を行っていました。手際よく実験を進め、どの生徒も集中して取り組んでいた。

研究授業後に、「探究未来学」の授業を見学した。これは理数アカデミーの取り組みの1つだそうで、1人1研究テーマのもと、高1生が情報を収集しているところです。これまで以上に、すべての生徒に自分の頭で考え、自分の言葉で表現することを狙いとしているようです。





2016.05.08

54 浅草周辺

浅草に出かけた。雷門をくぐってみると、その裏側に二体の像が建っている。門に向かって右側が金龍像（女性の姿）で左側が天龍像（男性の姿）。写真2は、隅田川岸から眺めたスカイツリー。写真3は、創業200年の老舗駒形「どぜう」店。





2016.04.24

55 科学博物館 生き物に学びくらしに活かす

御茶ノ水から上野の科学博物館へ。企画展「生き物に学びくらしに活かす」を見に足を運んだ。

生物学と工学が連携・協働し、生物に学びながら私たちの暮らしをより良くすることを目指す新しい学問としてバイオメテイクスがある。従来は、モノづくりへの活用が中心であったが、最近ではシロアリの巣の空気循環構造を建物の省エネルギー空調システムに活かすなど、社会問題の解決や新しい人間社会のあり方につなげるべく、より広い視野で研究が進められている。この展示は、科研費新学術領域「生物規範工学」による研究成果であり、昆虫以外に魚類、鳥類、海洋生物を中心にバイオメテイクスの実例とそのモデルとなった生物、博物館が果たす役割、異分野の学術交流に役立つ情報科学技術などを紹介している（一部展示案内より抜粋）。





生き物に学びくらしに活かす その2

展示は、人間の文明と持続可能性、地球環境の悪化と生物多様性の喪失、バイオミテイクスが目指す未来図にまで及んでおり、見ごたえのあるものであった。





2016.03.13

56 一橋講堂 生命の起源と進化シンポジウム

自然科学研究機構のシンポジウム「生命の起源と進化ー地球から系外水惑星へー」に参加した。

会場は、学術総合センターです（写真1）。

6 演題の中で、心に留めた2 演題を報告する。

1. 「生命を宿す惑星の成り立ちを考える」

東京工業大学 玄田 英典准教授)

宇宙人は存在するか?の問いかけから始まった講演は、授業を聴講しているようで刺激的であった。2012年に玄田准教授が担当する大学授業において「宇宙人は存在するか」を授業前に問いかけたところ、90%の学生が「存在しない」と回答。しかし「生命の存在する星を宇宙で探す」授業後に同じ問いかけを行ったところ、「宇宙人は存在する」と回答した学生が50%まで変化した事例を紹介。このことから、授業は絶えず最先端の内容を紹介していくことで、聴講する学生の心に変化していくことを示唆している。

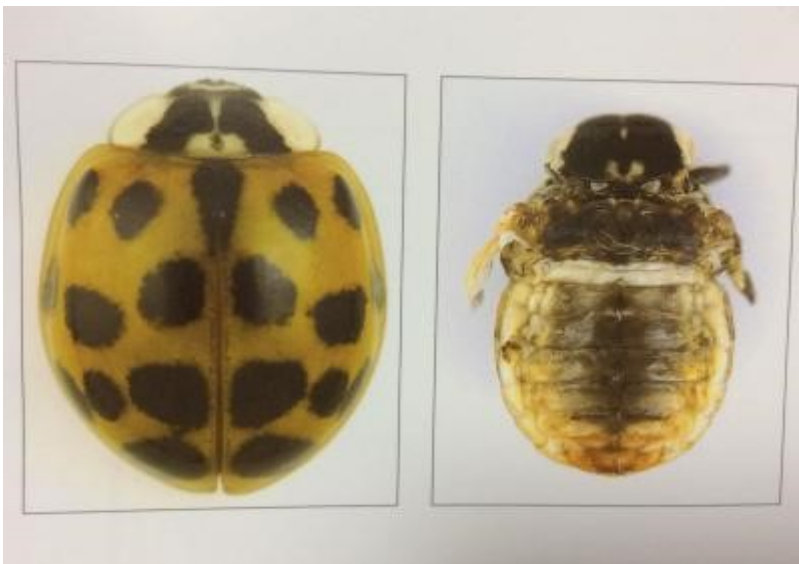
講演内容は生命を宿す惑星の条件となるのは、「水」の存在を挙げており、地球型惑星の生命が存在することの可能性を示している（写真2）。

2. 地球の覇者—昆虫の多様な世界

基礎生物学研究所 新美 輝幸教授

プレゼンテーションが上手で、しかも豊富な画像は聴講しているものにとって飽きさせない、わかりやすいものであった。大学授業で行う際の参考になった。講演内容は、昆虫だけが独自に獲得した翅に関する研究であった。写真3は正常なナミテントウ（左）と翅なしナミテントウ（右）。RNAi法により翅形成のマスター遺伝子の機能を阻害すると翅が形成されなくなる。飛べない翅をつくることで一度に多くのアブラムシを駆除することにつながったという研究は大変面白かった。このような学生にも興味を抱かせる授業を目指したいと考えた。





2016.01.11

57 東京理科大学 日本生物教育学会全国大会

1月10日・11日、第100回日本生物教育学会全国大会が東京理科大学で行われた（写真1, 2）。農大からは、農学科の院生・学生及び教員の計3名が参加し、口頭・ポスター・ワークショップ発表を行い、座長を務めるなどした。学会発表は、日頃の研究・教育の成果を公表するものであり、また情報交換の場でもある。記念講演（写真3）、シンポジウム（写真4）・ワークショップ（写真5）のほか、ポスター発表では一般部門の他に、近年どこの学会でも高校生部門（写真6）を設けており、活発な交流が見られました。充実した刺激的な2日間であった。



Part2



2020. 11.28

5 8. 神奈川近代文学館 大岡昇平の世界展

戦後 75 年を迎える今、大岡作品が伝えるメッセージを改めて見つめ直す機会となった。大岡昇平の生い立ちや人間や社会を見る目、書くという行為、影響を受けた作家など学ぶこと考えることの多いひと時でもあった。館内でコーヒーを飲みながら、大岡作品を読んでみようという機会にもなった。日本の文学史上に大きな足跡を残し、昭和を代表する作家・大岡昇平（1909～1988）。若き日に小林秀雄、中原中也らと出会い、スタンダードな作家として知られた大岡は、1944 年 35 歳で出征し、九死に一生を得て帰還する。戦後、実体験をもとにした「俘虜記」で小説家デビュー、戦後文学の最高峰といわれる「野火」、ベストセラー「武蔵野夫人」を発表。その後もさまざまなジャンルの作品を手掛け、研究、評論・翻訳に多くの業績を残した。1967 年には「レイテ戦記」の連載を開始。本展では、遺族から当館に寄贈された「大岡昇平文庫」の資料を中心に、生き残った者としての責任を負いながら、一文学者として戦後日本を歩み続けた、その生涯を辿る。知識人である大岡が、一兵卒として体験した戦争。その透徹したまなざしが描き出した作品は、人間の根源的な問いを内包する、優れた世界文学として読み継がれている（パンフレットより）。



2020. 11.28

5 9. 神奈川県立歴史博物館 特別展 相模川流域のみほとけ

相模原市、平塚市、藤沢市、厚木市、海老名市、寒川町、愛川町、茅ヶ崎市など地域にゆかりのある仏像などを鑑賞するため足を運んだ。地元茅ヶ崎市では、下寺尾廃寺跡の瓦、銅製品、匙など、宝正寺の阿弥陀如来と両脇侍立像、浄見寺の弁才天坐像などが出展されており、見ごたえある仏像が多く、心安らぐひとときであった。



2020. 12. 05

60. 小田原駅東口 ミナカ小田原 市立図書館

小田原市の小田原駅東口の再開発事業で 12 月 4 日にオープンした複合商業施設「ミナカ小田原」6 F の市立図書館を訪ねる機会があった。ワンフロア内の図書館はゆったりとしたスペースであった。椅子に座りながら 39 歳で夭折した高橋和巳の本を手に取り、しばしくつろいだ。フロアからは小田原城の天守閣が目の前に見ることができた。

